

日中相互交流による実践的 若年技術者の育成

～ 平成17年度 成果報告書 ～



佐世保工業高等専門学校

〒857-1193 長崎県佐世保市沖新町1-1
Tel : 0956-34-8415, FAX:0956-34-8409
Sasebo National College of Technology
1-1 Okishin, Sasebo, Nagasaki 857-1193
TEL:+81-956-34-8415,FAX:+81-956-34-8409
e-mail : kikaku@post.cc.sasebo.ac.jp
URL:http://www.sasebo.ac.jp/



廈門理工学院

廈門市思明南路 394
Tel : 0592-2189537, FAX:0592-2086993
394 South Siming Road, Xiamen, P.R.China
TEL:(86)592-2189537,FAX:(86)592-2086993
e-mail : xmlg@xmut.edu.cn
URL:http://www.xmut.edu.cn



平成17年度一平成20年度
佐世保工業高等専門学校
現代的教育ニーズ取組支援プログラム
取組成果報告書

目次

I. 巻頭言

1. 「佐世保市長と現代G P」 佐世保工業高等専門学校長 井上雅弘
2. 日中相互交流による実践的若年技術者の育成ー「佐世保市・中国ウェルカム学術研究交流特区」利用地域活性化プログラムー 現代G P 事業推進責任者 須田義昭

II. 取組概要

III. インターンシップ受入事業報告書

1. 「厦門理工学院との学術交流について」 電気電子工学科 川崎仁晴
2. 「佐世保高専訪問に感じたこと」 厦門理工学院日本語科講師 魏麗春
3. 「赴日本佐世堡高等专门学校交流体会和感想」 電子系 王德明
4. 「赴日交流的心得体」 03 电气 蔡鸿扬

IV. インターンシップ派遣事業報告書

1. 「沟通从心灵开始」 厦門理工学院 陈 越
2. 「アモイ・厦門・X i a m e n 交流記」 機械工学科 森川浩次
3. 「厦門理工学院との学術交流について～中国滞在記～」 物質工学科 渡辺哲也
4. 「厦門理工学院訪問記」 電子制御工学科 前田貴信
5. 「厦門感想文」 専攻科 機械工学専攻 2年 井村洋平
6. 「厦門研修報告書」 専攻科 物質工学専攻 2年 里見暢子
7. 「アモイでの研修を終えて」 専攻科 機械工学専攻 2年 高木大介
8. 「厦門研修報告書」 専攻科 機械工学専攻 2年 力石賢一

V. 活動報告書

1. 「中国厦門理工学院から李達副校長、陳越校長事務室職員の訪問」
2. 「厦門理工学院留学経験者、中国留学経験者および中国進出企業関係者による講演会開催」
3. 「中国進出企業関係者による講演会開催」
4. 「本校教職員と専攻科生対象の『中国語会話講座』を実施」
5. 「日中交流熊本大学上海フォーラム2005への教員の派遣」
6. 「現代G P 大阪地区出張報告書」 学術交流委員 川崎仁晴, 重松利信
7. 「中国上海近郊地区企業訪問報告書」 学術交流委員 重松利信, 森下浩二
8. 「現代G P 東京地区出張報告書」 学術交流委員 小野文慈, 森下浩二
9. 「中国上海近郊地区企業訪問報告書」 学術交流委員 須田義昭, 小野文慈
10. 「現代G P 南紀地区高専出張報告書」 学術交流委員 川崎仁晴

VI. その他の報告事項

VII. あとがきにかえて

I. 巻頭言

「佐世保市長と現代G P」

佐世保工業高等専門学校長 井上雅弘

高専のミッションは実践的で創造性豊かな技術者の育成である。このミッションを果たすため、本校では「複合型もの創り工学」という JABEE 認定技術者教育プログラムを実施し、専門分野の枠をはずした融合教育を行うとともに学生の国際的センスを涵養し、グローバルにものごとを考えることができる視野の広い技術者の育成に努めている。現代G Pに採用された「日中相互交流による実践的若年技術者の育成」は国際的センス涵養の一環である。



資源の無い我が国が「ものづくり」先進国として世界をリードするためには国際性に富む技術者の育成が肝要であることはいうまでもない。とくに、製造業の海外生産高が全生産高の20%を超え50%以上の生産を海外に依存する大企業も増えつつある中で、「世界の工場」へと進出し続ける中国との協業は不可欠であり、日中両方でお互いに理解しあえる若手技術者の育成は急務である。本現代G Pプログラムは、その一翼を担うべく本年度から取り組み始めた日中交流による技術者育成を、さらに拡大することを企図している。

ところで、本校の JABEE 認定技術者教育プログラムの良き理解者でありかつ強力な支援者として、光武頭佐世保市長のことを紹介したい。市長には、ご多忙中にもかかわらず、第1回 JABEE 認定技術者教育プログラム修了書授与式において21人の修了生に祝辞と激励の言葉を述べていただいただけではなく、佐世保市広報誌の自らが執筆される「こんにちわ市長です」の欄で、この教育プログラムの概要を佐世保市民に紹介していただいた。

本現代G Pプログラム構築のきっかけも市長に負うところが大きい。2004年10月に佐世保市・廈門市友好都市締結20周年記念行事として市長を団長とする総勢180人の友好親善訪問団が廈門市を訪れ、メインイベントの一つとして佐世保高専と廈門理工学院との学術交流協定が結ばれ、これを契機に学生の交流が実現した。交流に必要な経費については、旅費は派遣者側負担、滞在費は受入側負担であった。市長は、廈門理工学院学生受入費用を地元ロータリクラブをお願いすることを勧めて下さった。2005年夏に本校を訪れた廈門理工学院学生は、本校寮生会主催の歓迎会や剣道部における体験交流をはじめ数々の有意義な交流活動を行ったが、市長への表敬訪問後、市長からの直々の電話により急遽実現した市長招待晩餐会にはとりわけ感動していた。

市長は少年の一時期を中国で生活されたご経験があり、これからの中国との交流の必要性を身をもって実感されているようである。本年度、佐世保市は「佐世保市・中国ウェルカム学術研究交流特区」の指定を受けた。本G Pプログラム実行に際して、中国との交流拡大の業務遂行にその特典を大いに利用させていただく予定である。

歴史的に不幸な過去の出来事により生じたギクシャクした日中関係を克服し、日中が協力しあって地球環境にやさしい「ものづくり」を推進することは、21世紀の最重要課題の1つであり、そのために本現代G Pプログラムが果たす役割は大きいと信じている。そして、市長もその成功を心から願っておられるに違いない。

日中相互交流による実践的若年技術者の育成—「佐世保市・中国ウェルカム学術研究交流特区」利用地域活性化プログラム—

現代G P 事業推進責任者 須田義昭

文部科学省が推進する研究および教育に対する先進的取組の拠点校づくり事業のうち、「平成17年度現代的教育ニーズ取組支援プログラム（いわゆる現代G P）」に佐世保高専の取組「日中相互交流による実践的若年技術者の育成—「佐世保市・中国ウェルカム学術研究交流特区」利用地域活性化プログラムが、昨年8月に採択されました。本募集に対しては、テーマ1～6の部門の取組に全国の大学・短大・高専等から509件の応募があり、その中から優れた教育プログラム84件が採択されました。特に、本校が申請したテーマ「地域活性化への貢献（広域展開型）」の分野では、109件の申請に対し18件が選定されました（選定率は16.5%）。この分野において、我々の取組は高専で唯一の取組となります。



本教育プログラムは、佐世保市と中国の経済交流と相互発展のために、「佐世保市・中国ウェルカム学術研究交流特区」を利用し、中国現地企業・大学・佐世保市近郊の地元企業等を中心に産学一体となった交流事業に学生自身を参加させ、地域の活性化を図ると共に、相互の国際的理解を深めることで日中双方の実践的若年技術者を育成する取組であります。取組は大きく3つに分けられます。まず、日中相互国際交流であることの利点を生かし、日中受講学生の双方が納得できる充実した内容とするための仕組みづくりと広報を行います。次に、日中現地企業・大学での研修実施及び日中相互交流インターンシップ終了後の成果発表会を開催し、実習テーマと学生の希望との摺合せのためのテーマ選定と実施支援を行います。最後にモデルカリキュラムの設定及び評価委員会による評価を行います。

平成17年度10月から本格的に取り組んでいる本教育プログラムは、半年という極めて短い期間ではありますが、事業推進代表者井上校長はじめ、学術交流委員や事業推進担当者の方々の献身的なご努力とご協力によって所期の目標をほぼ達成することができました。ここに、半年にわたる諸活動の報告と日中交流事業の成果を報告書として取りまとめましたので、ご報告致します。

本事業推進責任者として、本冊子が今後3年間の日中交流事業の更なる発展の源となり、日中双方の若年技術者が両国の相互理解を深め、新しい信頼関係を構築できることを願ってやみません。

II. 取組概要

日中相互交流による実践的若年技術者の育成

「佐世保市・中国ウェルカム学術研究交流特区」利用地域活性化プログラム

＜本プログラムの目的＞

1. 先入観のない日中若年技術者同士の相互交流による現場レベルの国際的理解
2. 中国の工業生産現場で活躍できる日本・中国双方の実践的若年技術者の育成
3. 日中交流による佐世保市ならびに北部九州全域の地域活性化

＜これまでの経緯＞

佐世保工業高等専門学校

厦門理工学院

- ①昭和57年10月：佐世保市・厦門市一友好都市締結
- ②平成16年10月：佐世保高専・厦門理工学院一学術交流協定締結
- ③平成17年4月：**佐世保市・中国ウェルカム学術研究交流特別区域**指定
- ④中国進出企業（辻産業や日本理工医学研究所等）があり、既にインターンシップ受入の働きかけを行っている。
- ⑤平成17年7月：厦門理工学院との学術交流事業として、3週間の学生・教員受入事業を遂行した。

本プログラム事業内容

1. 日中相互交流インターンシップミーティング開催
2. 日中相互交流インターンシップ実施と成果発表会開催
3. 日中現地企業・大学・高専での先端技術研修
4. 日中相互交流評価委員によるプログラム改善

佐世保市,大村市(コマツ電子),諫早市(ソニー),長崎市(三菱),北九州市(安川),福岡市(富士通),熊本市(オムロン)等

厦門市(DELL),承德市(承德専科学校),泉州市,張家港市(辻産業),昆山市(日本理工医学研究所)等

本科生や北部九州全域企業へ拡張

中国全土への拡張

＜本プログラムの社会的効果＝地域社会への貢献＞

1. 中国に市場進出している地域企業及びこれから進出しようとしている地域企業において、高いニーズのある、**中国で即戦力として働ける日本人実践的若年技術者を育成**できる。
2. 中国の日系企業で需要が高まりつつある、**日本企業の経営方針を理解した中国人実践的若年技術者の育成**ができる。

日中双方の若年技術者が両国の相互理解を深めることにより、経済発展ための共通の目的意識を有し、互いの国益の向上と新しい信頼関係を構築する。

本年度の事業一覧

※本事業開始時期は平成17年10月であるが、日中交流は平成17年4月から行っている。よって、ここでは平成17年4月以降の事業に関して時系列で示す。

1	平成17年5月31日～6月1日	中国厦門理工学院から李達副校長、陳越校長事務室職員の訪問
2	平成17年7月19日～8月5日	中国厦門理工学院から本校へ教員2名、学生4名の受入（相互インターンシップ事業）
3	平成17年8月10日	現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）に採択決定
4	平成17年10月12日～13日	厦門理工学院留学経験者、中国留学経験者および中国進出企業関係者（計3名）による講演会開催
5	平成17年10月24日～平成18年2月27日	本校教職員と専攻科生対象の「中国語会話講座」を実施
6	平成17年10月27日～10月28日	オークラガーデンホテル上海で開催された日中交流熊本大学上海フォーラム2005に派遣
7	平成17年10月18日～11月4日	本校から中国厦門理工学院へ教員延べ3名、学生4名の派遣（相互インターンシップ事業）
8	平成17年11月28日～29日	大阪地区の中国進出企業・大学訪問調査
9	平成17年12月4日～12月9日	中国上海市近隣の大学等及び日系企業訪問調査
10	平成17年12月14日～15日	東京地区の中国進出企業・大学訪問調査
11	平成17年12月19日～23日	中国厦門市近隣の大学等及び日系企業訪問調査
12	平成17年12月21日～23日	三重・和歌山地区の中国進出高専・大学訪問調査
13	平成18年1月5日～1月6日	富山工業高等専門学校訪問調査
14	平成18年2月2日	中国進出企業関係者による講演会開催
15	平成18年3月2日	第1回佐世保－中国国際交流フォーラムの開催
16	平成18年3月4日	東京フォーラム参加

Ⅲ. インターンシップ受入事業報告書

「厦門理工学院の学生・教員受入事業」

教員

王徳明 先生 電気学部 高級エンジニア

魏麗春 先生 日本語学部 講師

学生

蔡鴻揚 君 電気学部 2年生

彭南昌 君 電気学部 2年生

王瑞珍 さん 電気学部 2年生

陈菊妹 さん 日本語学部 2年生

日程

平成 17 年 7 月 19 日	入国，空港出迎，学寮案内，校長・主事・専攻科長等挨拶面談，学内案内，専攻科生との対面，歓迎会
平成 17 年 7 月 20 日-21 日	授業見学，学部生の実験・卒業研究の見学・参加，ロボコン・クラブ活動見学・参加
平成 17 年 7 月 22 日	専攻科生との相互勉強会（お互いの研究紹介）
平成 17 年 7 月 23 日-24 日	文化施設訪問（平戸，ハウステンボス等）
平成 17 年 7 月 25 日	市役所など訪問
平成 17 年 7 月 26 日	工業技術センター見学
平成 17 年 7 月 27 日	随行教員のセミナー
平成 17 年 7 月 28 日-8 月 3 日	工場・文化施設訪問（コマツ電子，ソニー長崎，トヨタ，九電エネルギー館，窯業技術センター等）
平成 17 年 8 月 4 日	校長・主事・専攻科長等挨拶・懇談会，専攻科生との懇談会，歓送会
平成 17 年 8 月 5 日	帰国

「厦門理工学院との学術交流について」

学術交流委員 電気電子工学科 川崎仁晴



平成17年7月19日から8月5日までの約3週間にかけて、本校における厦門理工学院との学術交流が行われた。ここでは交流の様子と私の個人的な感想を報告する。

1. 事業概要

この事業は、佐世保市が本年度から取り組んでいる「佐世保市・中国ウェルカム学術研究交流特区」事業の一環で、昨年学術交流協定を締結した中国厦門理工学院との相互インターンシップが基となる。今回は、厦門理工学院側から教員2名、学生4名の計6名(男：3名、女：3名)が来校された。大まかな計画は以下の通りである。

7/19-22：授業見学とクラブ活動体験参加

7/23-27：市役所訪問、交流員セミナー等交流事業実施

7/28-8/5：工場見学、長崎、福岡文化施設見学

2. 事業経過

来校予定の7月19日は、中国厦門付近に台風が近づき訪問が危ぶまれたが、運良く無事に到着された。7月20日には、歓迎パーティーが行われた。学生同士はこの場で親交を深めたようである。

7月22日までの3日間は、主に授業とクラブ活動の見学を行った。授業見学では、主に電気工学科の王先生とその学生さんが電気電子工学科や電子制御工学科の授業見学を行った。特に本科3-4年生の授業は、学年が近く、学習内容が似ていたため、分かりやすかったようで事後にいろいろな質問があったようである。

クラブ見学は、特に武道関係に興味を持っていたようで柔道、剣道、空手に興味がある様子だった。剣道部では、防具をつけた本格的な体験学習が行われた。部員とも意気投合したようである。ただし、時間の都合で柔道や空手の方は短時間見学だけとなってしまい、非常に残念そうだった。これ以外では、野球を見るのが初めてだったようで、特に男子学生は物珍しそうだった。一方、卓球にはあまり興味を示さなかったのは意外だった。

交流員同士の相互セミナーは、本校が夏休みに入ってから行われた。学生同士の交流では、本校専攻科2年生の4名がそれぞれ自分の研究内容の報告を行った。特に、音楽の研究報告とロボット制御に関する研究報告に関しては非常に興味深く聞き入っていた。厦門側の学生はまだ研究を行っていないので、現在取り組んでいる勉強についての報告が行われた。

工場見学と文化施設の見学は本年度は長崎県と福岡県を中心に行った。工場見学は三菱電機、コマツ電子、ソニー長崎の見学を行った。三菱電機では、主に発電機の基本的生産現場を見学した。コマツ電子では、シリコンウェハの製造工程を見学した。ソニー長崎では、ナノ配線に関する説明と、メモリー等の製造工程の見学が行われた。福岡地区では、トヨタ自動車の生産工場見学を行った。学生の人気はソニーやトヨタが最も高かったようであるが、教員はコマツ電子金属

の300mm ウェハ作製施設に興味を持ったようで、後でいろいろと質問を受けた。

文化施設見学は、厦門で鄭成功が有名であるということで、平戸地区の見学を行った。日本ではあまり有名ではないこともあり、施設見学はあまり長い時間できなかつたが、その分近くの町並や海岸をゆっくりと散策できたようである。その他にも当初は、長崎の孔子廟や崇福寺、福岡の金印公園や東公園等を案内する予定だったが、時間の都合と交流員の希望で、グラバー園など数カ所を見学するにとどまった。

3. 全体の感想

「先入観」はこの事業の大きなテーマの一つであるが、今回それを痛感したことがいくつかある。それは中国的な文化施設にあまり興味を示さなかつたこと、工場見学であまり驚かなかつたこと、卓球ではなく剣道や野球に興味を示したこと、電気店等では「高い！」を連発していたこと等である（インターネットの広まりにより、日本語がわかる先生にとっては、店頭販売価格が通信販売価格より高く感じられたため）。日本人の持つ日本のイメージ（＝先入観）は世界では通じないということであろうか。その一方で、学生同士の交流は、驚くべき早さで進んだ様子で、最後には日本語と英語と中国語が入り交じった不思議な談笑が尽きないようであった。このことは、この事業の成果の大きさを期待させるとともに、我々教員側も普段の講義等で悪い「先入観」を植え付け無い様、十分気をつける必要があると感じた。

今回来校された厦門理工学院教員の感想として、日本の海や道路がきれいであること、学生が勉強熱心で礼儀正しいことなどを述べられていた。しかし個人的には、厦門側の交流学生の方が勉強熱心で、積極的であった。寮内でも夜遅くまで熱心に勉強していたようである。

本年度は初年度ということでもいろいろと不備な点があつた。夏休み直前から交流事業を始めたため、本科学生との交流機会が少なかつたことや、工場見学場所が多すぎ、やや消化不良の感があつたことなどである。今後はこの点を改善し、より発展的な交流事業を行っていきたい。



交流風景



今回交流した人たち（左から王先生、魏先生、王さん、陈さん、蔡さん、彭さん）

佐世保高専訪問に感じたこと

厦門理工学院日本語科講師 魏麗春

今年の夏休みに私は五年ぶりにまた日本の土を踏みました。五年前の訪日研修と違って、今度は厦門理工学院交流団の一員として姉妹学校の佐世保工業高等専門学校を訪問しました。ただ三週間の短い間ですが、佐世保高専での授業見学や、佐世保・長崎・平戸・福岡の市内見物などいろいろ経験しました。佐世保高専の皆様のおかげで、たいへんいい思い出を作りました。

異国情緒のあふれるハウステンボス、厦門でよく知られている民族英雄鄭成功の生地——平戸、大学時代の恩師山口先生の出身地——長崎市、いずれも五年前に一度行ったことがある馴染み深いところです。出国とはいうものの、国を離れて遠く外国へ行ったような実感があまりありませんでした。それに、一番恐れていた地震も今回の滞在中、一度も感じなかったのも、さらに自分が地震多発な日本にいるのを忘れさせました。ただし、町を回ったとき、ちょっと変わったなあと、度々思ったこともあります。なぜかというと、至るところは清掃員の姿を見かけないのに変わりなくきれいで、ごみ一つもないし、横断歩道の前に運転手が必ず車をとめて歩行者が渡るのを待ったり、人々がごみを細かくわけて出したりしているからです。こうした風景は中国ではめったに見られないのです。それを見ると、自分がやはり外国にいたのかと思いつきました。こうしてこの目で日本を見たりして、いろいろ考えさせられ、中国人として再認識、再出発ができたこともたいへんうれしく思っています。

もう一つしみじみと感じたのは言葉の大切さです。佐世保高専についての初日のことを今もはっきりと覚えています。私たち一行六人は男性三人が男子寮、女性三人が男子寮と少し離れた女子寮に入寮したのです。私は女子寮に荷物を運び、部屋でちょっと片付けしようと思ったとき、団長の王先生から緊急電話が入ってきました。日本語の分からない彼ら三人は、英語も不自由だから、手ぶり足ぶりでも寮側の先生とうまく交渉できなかつたようです。慌てて彼らのところに行ったら、もう手も足も出なく救いの神を待つしかないように私が来るのを一生懸命待っていたのです。私は、急に完全な別世界に置かれた彼らの無力さをつくづくと感じ取りました。国際交流における言葉の大切さはもう言うまでもありません。また、私は通訳として、両方の意志疎通のために重い責任を持っているかわりに、自分の説明を通して両方が通じ合ったのはこの上もない楽しいことでもあります。しかし、私のような言葉しかできない人には電子や機械のことを理解するのも相当難しいことです。だから、国際交流をスムーズにさせるには、交流にあたる者の外国語の習得が必要だと思います。特に専門分野の共同研究となると、単に通訳に頼ってはどうしても限度があるように思われます。

以上は簡単な感想ですが、日本の美しい自然、高専先生達の親切さと細かいところまでのお心遣いも記憶になお新しいです。佐世保高専の皆様、ありがとうございました。

赴日本佐世堡高等专门学校交流体会和感想

电子系 王德明

2005年7月19日至8月5日，我们师生一行6人代表厦门理工学院，赴日本佐世堡工业高等专门学校进行为期18天的交流活动，

参观了该校实验室、学生俱乐部活动中心等各项硬件设施，与他们一起听课、活动、交流，体验了日本教育、异国学生的学习、生活，增进了与日本和佐世堡工业高等专门学校彼此之间的了解、友谊和相互关系，从中领悟了他们先进的教学理念，良好的教学素质，主要体现在如下几个方面：

一、在理论教学方面注重直观教学方法，倡导学生直接参与体验课堂教学：例如：在《自动控制原理》课“反馈”概念的引入时，教师用“带有刚性而又柔软的卷尺”，演示“如何控制卷尺直立且平衡在空中”的事例，巧妙地引出“反馈”的概念，并导入新课的内容；又如：“整流电路”课中，教师在授课时有目的、有计划、有步骤的“提问”，让学生思考，并让学生到黑板前演练题目。这种师生双向互动有助于学生的注意力集中，活跃了课堂气氛，既巩固了讲述内容，又充分调动学生积极主动的思维活动，自觉地掌握课堂内的知识点，提高了独立思考问题和解决问题的能力。

二、重视实验、实习环节，培养学生丰富的创造能力和实践能力。例如：每年的全国大学生机器人的竞赛，科研项目（如条码型价签式的新技术、金属金相、半导体晶体检测等）等课外科技活动，弥补学生在书本上和课堂上没有学到的知识和技能，以提高他们终身受益的动手能力，为学生丰富专业知识、创造能力与动手能力创建了良好的实践环境（空间）。

三、听取了专攻科学生课题研究目既（学术论文）的展示与交流，学生课题研究项目既强调实践能力的培养，又具有理论性与趣味性，学生理论知识扎实，技术能力培养全面。

总之，感受了佐世堡高专的教育理念、教育目标和教育特色，即重视实验、实习和俱乐部活动、重视培养具有多视角思维能力、应用型、富有行动能力的操作型专门人才。

我们还参观了SONY、小松电器、三菱电器、丰田等世界知名企业和科研单位。在SONY企业科技展示馆，热情接待我们的讲解员，为我们展示了SONY从企业初创，到如今处于世界电子产品前沿如数字网络、环保等各类电器产品。大家了解了SONY电器产品集小、巧、精尖、环保化、综合化为一体的产品特色，了解了世界电气行业高科技发展形势，开拓了我们对我国电气行业发展的认识，对我校电气、信息类专业教学与科研将有所裨益。

在丰田汽车产品展示馆，我们参观了丰田生产最新推出的各型各款汽车。安全、环保、节能、迅捷、个性化是这些汽车产品追求的目标。参观丰田汽车生产流水线，我们感受到了丰田汽车板块管理模式的先进性，工人在生产流水线作业规范、迅捷，敬业的工作态度给大家留下了深刻的印象。

同时还游览日本长崎县的名胜古迹，体会到了日本的传统文化和饮食习惯；日本人民重视礼仪、礼节、热情好客；日本优美整洁的自然环境、自觉遵守规则、较强的环保意识；高度的敬业精神；做事情计划性强、安排周密细致、且注意信息反馈等等……，给我们留下了深刻的印象。

总之，这次是一次很有意义的交流活动。有益于我们两校在各方面更广泛、更深层次的合作，也有益于增进中日两国人民的友谊，愿我们两校交流活动长期以来并结出丰硕成果！

前頁の翻訳

日本佐世保高等専門学校訪問における交流体験と感想

電子系 王 徳 明

2005年7月19日から8月5日に亘り、私達教員・生徒一行6名はアモイ理工学院を代表して日本佐世保工業高等専門学校を訪問し、18日間の交流活動を行った。同校の実験室、学生クラブ活動センター等の各種施設を参観したほか、生徒と一緒に授業を受け、活動、交流を行い、日本の教育、海外の学生の学習、生活を体験し、日本と佐世保工業高等専門学校に対する理解、友情、相互関係を深めた。また、そうした中で日本側の先進的な教学理念、良好な教学資質が主に以下の幾つかの点にあることを理解するに至った。

一、理論教学の面においては直感的教学方法が重視され、生徒が直に教室教学で体験することが提唱されている。例えば、「自動制御原理」の単元で「フィードバック」の概念が出てきた際、教師は「硬い性質と柔軟な性質を有する巻尺」を使って、「如何にして巻尺が空中において直立の状態でもバランスを維持するのか」といった事例を実演し、巧みに「フィードバック」の概念を示すと共に、次の新しい単元の内容に生徒を導いていた。また、「整流電気回路」の単元においては、教師は授業中、目的、計画、プロセスを踏まえながら「質問」を行い、生徒に考えさせると共に、生徒に黒板で問題を解かせるようにしていた。こうした教師と生徒間の相互コミュニケーションは、生徒の集中力を高めるのに役立ち、授業の雰囲気を活発なものとしていた。授業の内容がしっかりとするだけでなく、生徒の積極的な主体的な思考活動が十分に引き出されるため、生徒が授業のポイントを自覚的に把握し、独自に問題を思考して問題を解決する能力が高まるようになっている。

二、実験、実習のプロセスを重視し、生徒の豊富な創造力と実践能力が育成されている。例えば、毎年行われる全国大学生ロボットコンテスト、科学研究プロジェクト（バーコード型シェルフラベルの新技术、金属金相、半導体結晶体の検査測定等）等の課外科学技術活動は、生徒に教科書や教室で学べない知識と技能を補い、生徒が生涯に亘り役に立つ着手能力を高めるほか、生徒がその知識、創造力、着手能力を豊かにする上で良好な実践環境（空間）を提供するものとなっている。

三、専攻科学生の課題研究（学術論文）の展示と交流について、学生の課題研究項目は、実践能力の育成が強調される一方、理論と趣味が兼ね合わされるようになっている。また、生徒の理論知識はしっかりとしており、技術能力も全面的に育成されるようになっている。

全体的として見ると、佐世保高専の教育理念、教育目標、教育の特色を実感することが出来た。即ちそれらは、実験、実習、クラブ活動を重視し、多角的な思考能力を備え、応用型の行動力に富んだ操作タイプの専門的人材を育成するというものである。

私達は更にSONY、小松電気、三菱電機、トヨタ等の世界的に有名な企業や科学研究部門を参観した。SONYの企業科学技術展示館では、私達を熱心に迎えてくれた案内スタッフの方が、私達のためにSONYの創業の歴史から、今日の世界の最先端にあるデジタルネットワーク、環境保護等の各種電器製品等の電子製品に至るまでを説明していただいた。全員がSONYの電器製品が小型、巧み、精鋭、環境保護、総合化といった項目が一体化されたものであることを理解した。また、世界の電器業界のハイテク情勢についても理解し、中国の電気産業の発展に対する認識を深めた。こうした知識は、我が校の電気、情報類の専業教学と科学技術研究にとっても役立つものである。

トヨタ自動車の製品展示館では、私達はトヨタが生産・販売する各種の最新型自動車を参観した。安全、環境保護、省エネルギー、迅速、個性化がこれらの自動車でも追求される目標となっている。トヨタ自動車の生産ラインを参観した際、私達はトヨタ自動車の看板管理モデルの先進性を実感した。また、生産ラインでの作業の規範性と迅速性、作業員の仕事を敬う作業態度には、全員が大きな感銘を受けた。

その他、日本の長崎県の観光名所・古跡を観光し、日本の伝統文化や飲食習慣を体験した。例えば、日本人は礼儀、礼節、もてなしを重視している。また、日本の優美な自然環境、規則遵守に対する自覚性、環境保護に対する高い意識、仕事を敬うことに対する高い精神等のほか、物事を行う際の高い計画性、周密な手配、情報のフィードバックに対する配慮等、これらはいずれも私達に深い印象を与えるものであった。

全体としてみれば、今回の訪問は非常に有意義な交流活動であった。両校の各方面においてより広範で、深いレベルの協役に役立つばかりでなく、日中両国民の友情の増進にも有益なものであり、両校の交流活動が末永いものとなると共に、豊富な成果を生み出すことを願いたい。

赴日交流的心得体

03 电气 蔡鸿扬

日本是世界著名的旅游大国之一，日本国内有许多吸引人的地方。东京的繁华、奈良的古老、北海道的神秘和圣洁都给人留下深刻的印象。而三月的樱花和遍布山间的温泉则使人流连忘返。日本被誉为极富自然之美，是亚洲大陆东边北太平洋上的一个岛国，它与我国隔海相望，一衣带水，使两国人民自古以来就有着丰富的文化交流和深厚的友谊。

今年暑假有幸参加了与日本长崎县佐市保工业高等专门学校进行文化、学术交流活动，并在日本长崎县佐市保市见闻了 18 天。日本之行让我感受颇深，无论在见识、学习、个人修养方面都有了显著的提高。

首先，当飞机到达日本领空时，从机舱向外望去，底下是一片绿色的树林，岛屿的形状清晰可变，周围是一片蓝色的海洋，时而又飘来朵朵白云，这种景色是我平生未见过的。想到即将踏上这片陌生的土地，那时的我感到兴奋不已。下了飞机，走出长崎国际机场，我们驱车行驶在霜向两车道的高速公路上，一路走过，有农田有小山坡也有工厂，和国内区别倒也不大，但是感到很整洁很有序。进入市内，站在市内的最高点向下看，佐市保市就像是一个一个小垃圾盒挤挤地排在一起，但当你身处于其中时，你又会感到非常得干净，一尘不染，闻不到一点废气的味道，这只能说明日本寸金寸土，对土地的利用到达了极至。

其次，在与佐市保市工业高等专门学校进行文化、学术交流的过程中，我深深的体会到高专学生在实际动手能力方面确实更胜一筹。从高专学生能够独立制作机器人来看，日方在教育方面很好的做到了理论与实践相结合，不仅使学生能够很好的掌握课本上的知识，而且能通过在实际操作过程中进一步检验学生的所掌握的理论知识。这一点我们确实要好好向人家学习。另一方面通过参观 SONY、TOYOTA、三菱电机、长崎工业技术中心等工厂，进一步感受到日本在高科技方面确实是处在世界领先水平。一个国家的强大主要体现在经济、军事、科技、教育等方面，我们所说的科教兴国确实在日本这个国家得到了很好的验证。

日本以“礼仪之邦”著称，讲究礼节是日本人的习俗。平时人们见面总要互施鞠躬礼，并说“您好”，“再见”，“请多关照”等。在这十八天中，日本人给我的印象最深，他们很有礼貌，很文明，遵守公共秩序。在那里我感到了一种中国汉唐时候的人的风尚，那就是谦让、有礼貌。在公共场合，没有大声喧哗、争抢座位，即使不小心撞到别人双方都会说对不起，也没有人会随地吐痰、乱扔垃圾；在那里几乎看不到乱穿马路的行为，即使在交通流量极高的时候，也不会出现像厦门那样严重的堵塞问题，值得一提的是，佐市保市内主要马路大都是双向四车道，没有自行车道，一般的马路基本都是两车道，自行车在人行道上行驶，即使这样，他们的交通也很有秩序。也许讲山川秀美中国胜于日本，但讲整体国民素质，我们中国人还必须迎头赶上。

自古以来，日本一直和我国频繁在经济，文化，教育等方面进行着交流，在日本有很多地方都能感受到中国的气味。值得一提的就是到处是中国的商品，无论在旅游区还是商业区，吃的用的穿的，无不充斥着中国的商品，翻天背面一看都是 Make in china。还有中国华侨在日本的长崎建有中国人的社区——中华街。据统计每年有许多游客光临此地，最吸引他们的还是这里的中华料理店！所谓“拉面”（日语为 RAMEN），即带汤水的面条，它原是从中国大陆流传过来的，但现在已成为日本的大众食品。

唯一遗憾的就是此次之行略显匆忙，我对日本的印象也只是大体上的。以后希望能够有更多的同学能够到日本去体验一下异国风情。在看到别人进步的一面，同时也看到自己在那一方面上的不足之处；拓宽一下自己的知识面，提高自己的个人修养。

前頁の翻訳

日本への訪問交流で得たもの

日本は世界的にも有名な観光大国の一つであり、日本の国内には人々を引き付ける多くの場所がある。東京の繁華街、奈良の古い歴史、北海道の神秘性と清らかさは人々に深い印象を与えている。また、3月の桜の花と山地に偏在する温泉は人々に家に帰ることすら忘れさせる。日本はその豊富な自然の美しさで賞賛され、アジア大陸の東側、北太平洋上にある島国である。日本と中国は海を隔てて向き合い、一依帯水の関係は、両国国民に古来より豊富な文化交流と深い友情を結ばせている。

今年の夏休みにおいて、私は日本の長崎県佐世保工業高等専門学校との文化、学術交流活動に参加する機会を得、日本の長崎県佐世保市に18日間滞在した。日本を訪問して本当に感銘を受け、見識、学習、個人修養のいずれの面も明らかに向上した。

まず、飛行機が日本の領空に至った際、機内の窓から外を眺めてみたが、下の景色は緑色の樹木、島嶼の形もくっきりとし形が様々に変化した。また、周囲の景色は青色の海洋であったほか、時折、白雲が浮かんでいるのが見えた。こうした景色は生まれて初めて体験するものであった。この見知らぬ土地にもうすぐ降りることになると思うと、私は興奮する気持ちを抑えられなかった。飛行機を降り、長崎国際飛行場を出た後、私達は車で二車線の高速道路を走った。途中、水田や丘が見えたほか、工場も見えた。中国との差はそれほど大きくなかったものの、それでもとても清潔で秩序があることを感じた。市内に入り、市内の一番高いところから下を見渡すと、佐世保市が小さな屑入れがひしめきあっているようにも見えた。しかし、市内に入ってみると街は非常に清潔で、ごみ一つなく、ごみの匂いもしない。これは日本において土地が大切にされ、土地の活用が非常によく行われていることを示すものである。

次に、佐世保工業高等専門学校での文化、学術交流についてですが、私は高専の生徒の実際的な技術能力が優れていることを深く実感しました。高専の生徒が独自にロボットを製作することが出来るということは、日本ではこの方面で理論と実践が上手に組み合わせられ、生徒が教科書の知識を把握出来るだけでなく、実際の操作過程において把握した理論的知識を検討することが出来るようになってきているということです。この点については、私達はしっかりと日本側に学ぶ必要があります。また、SONY、TOYOTA、三菱電機、長崎県工業技術センター、等の工場への参観を通じて、日本のハイテク技術が世界の最先端に位置していることを実感しました。一国の強さは主に経済、軍事、科学技術、教育などの面に体现されるが、中国で言われているところの所謂「科教興国」（科学技術教育による立国）は、日本という国家において最もよく立証されている。

日本は「礼儀の国」として知られており、礼儀に対するこだわりは日本人の習俗でもある。通常、人々が顔を会わせる場合、互いに腰を曲げて礼を交わすと同時に、「こんにちは」、「さようなら」、「宜しく願います」等の挨拶を言う必要がある。18日間の滞在期間中、日本の人々が私に与えた最も大きな印象は、日本の人々がとても礼儀正しく文化的で、公共の秩序を守っているということです。公共の場所では大声で騒いだり、席を争ったりするようなことはなく、不注意で他人にぶつかってもお互いに謝る。また、場所を選ばず痰を吐いたり、ゴミを捨てたりする人もいない。日本では道路をみだりに横切る行為を見ることがほとんどなく、交通量が非常に多い時間帯でも、アモイのようなひどい交通渋滞となることはまずない。ここで指摘しておきたいのが、佐世保市内の幹線道路は全て4車線で自転車通路がなく、また、一般道路は基本的に2車線で自転車が歩道を走行しているのに、交通秩序がしっかりと保たれているということです。中国は山川の優美さでは日本を凌ぐかもしれないけれど、国民全体の資質といった面においては、私達中国人は（日本人に）追いつくように努力しなければなりません。

古来より、日本は一貫して中国と経済、文化、教育等の面において交流を行い続けており、日本の様々な場所において中国のこのことを感じ取ることが出来る。ここで触れておきたいのが、中国の商品がどこにでもあるということです。観光エリアであるかビジネスエリアであるかを問わず、食べるもの、使うもの、着るものについては、中国の商品が氾濫しており、商品を裏返すと全て「Made in China」となっている。また、日本の長崎には華僑が中国人コミュニティ「中華街」を築いている。統計によると、毎年多くの観光客がここを訪問するが、観光客を最も引き付けているのがこの中華料理屋の「拉面」（日本語ではラーメン）である。ラーメンはスープ付の麺のことで、元々中国大陸から伝わったものだが、現在では日本の大衆食品となっている。

唯一残念であったのは、今回の訪問が少し忙しく、日本に対する印象もおおまかなものに過ぎないことである。今後、更に多くのクラスメートが日本に行き、日本の風情を体験することを希望します。他人の進歩した一面を見ることは、自分に足りない一面を知ることになるし、自らの知見を広げることは、個人の修養を高めることになるからです。

III. インターンシップ受入事業報告書



IV. インターンシップ派遣事業報告書

「厦門理工学院への学生・教員派遣事業」

教員

森川浩次	機械工学科	講師
渡辺哲也	物質工学科	助教授
前田貴信	電子制御工学科	助手

学生

井村洋平	機械工学専攻	2年生
高木大介	機械工学専攻	2年生
力石賢一	機械工学専攻	2年生
里見暢子	物質工学専攻	2年生

日程

平成 17 年 10 月 18 日	入国, 空港出迎, 歓迎会, 校内案内, 歓迎宴会
平成 17 年 10 月 19 日-20 日	授業見学, 実験実習・見学, 市役所訪問, 太極拳練習
平成 17 年 10 月 21 日-23 日	随行者セミナー (森川先生), 文化施設訪問 (金厦海域)
平成 17 年 10 月 24 日	機械工学科授業見学, 太極拳練習
平成 17 年 10 月 25 日	文化施設訪問
平成 17 年 10 月 26 日	随行者セミナー (渡辺先生), 中日文化交流会
平成 17 年 10 月 27 日	院長セミナー, 中日文化研修会, 太極拳練習
平成 17 年 10 月 28 日	自由行動, 交歓会
平成 17 年 10 月 29 日	観光, 温泉浴
平成 17 年 10 月 30 日	中国家庭訪問
平成 17 年 10 月 31 日	工場見学
平成 17 年 11 月 1 日	TDK会社見学, 集美見学, 太極拳練習
平成 17 年 11 月 2 日	随行者セミナー (前田先生)
平成 17 年 11 月 3 日	市内観光, 懇談会, 送迎会
平成 17 年 11 月 4 日	自由行動, 帰国

沟通从心灵开始

厦门理工学院 陈 越

2005年10月18日,当我带领学生们站在厦门机场迎候佐世保高专第一批交流访问团师生的时候,心情是既高兴又担心。喜的是经过三年的接触与筹备,两校正式签定了友好交流协议并开始了实质性的交流活动。忧的是我院师生在7月赴日期间受到贵校无微不至的照顾,如今佐世保高专师生到我校,他们是否能够适应这里的生活与学习?我们制定的交流计划能否满足他们的要求。正是在这种复杂的心情下我们迎来了佐世保高专的师生们。可以感觉到,刚刚走下飞机,踏上厦门土地的佐世保高专的师生们同样是既兴奋又紧张的心情。不过当他们看到迎接他们的是一张张同样年轻的笑脸,听到的是那熟悉的日语,他们的心似乎平静了许多,厦门理工学院为他们准备的交流学习计划又让他们充满好奇与向往。

接下来的活动在有条不紊中进行,既有对口的专业学习,又有精彩的学术讲座,更有学生向往已久的中国文化大餐:太极拳练习,茶道表演,中国饮食文化,中秋搏饼等等;厦门及周边的景点游览及中国家庭访问,让他们对厦门这个温馨城市有了初步感受。同样厦门拥挤的交通,长达三个小时的午休时间及农村落后的卫生状况也让他们惊讶不已。不过第一次出国体验,让他们真正感受到中国的发展速度,让他们体验到中国人的热情好客,这些无疑将是一份宝贵的财富永远留在他们记忆中。

11月4日,交流活动落下帷幕。在机场,两校同学紧紧拥抱,在依依不舍中挥泪道别。短短十几天的交流,让年轻人从陌生到熟悉,从相敬相知。友谊之花在年轻人心中悄悄绽放。作为两校结好的见证人与交流活动的参与者,我对去年的交流成果感到无比欣慰,但我也深感我们工作中的不足,因此,今年在佐世保召开的第一届中国国际交流研讨会是非常及时和有意义的,它将帮助我们总结经验更好地开展今后的工作。

最后对于去年的交流工作,本人谈三点感受和希望:

第一:在世界局势趋于和平及国际经济一体化的前提下,中日两国作为亚洲近邻应该更加紧密联系,相互合作。尽管目前中日之间存在种种不和谐的因素,但它们不能成为阻碍我们交流的理由。交流、合作、相互提携应是我们共同追求的目标,我们相信今后两校的合作交流会开展得更频繁,更充实,更有意义。

第二:未来的世界属于年轻一代,二十世纪的美好明天将由年轻人来创造,因此我们要充分创造条件,为年轻人的交流提供可靠的平台。去年我们双方只有四名学生参与了活动,我希望今年能扩大交流名额,有更多的人参加到此活动中。

第三:培养具有国际视野,国际交流活动和国际竞争力的年轻技术者是我们的目标。因此今后的活动应加大专业学习交流的内容,充分利用两校的各自优势,让他们在专业学习中有更大的收获。

中日友好需要年轻一代来传承,需要年轻一代从心灵开始沟通,我们期待两校的合作能结出丰硕成果,为两校发展增添生机。我们有理由相信,沟通交流能让我们彼此消除隔阂,共同创造美好的明天。

前頁の翻訳

心から始まる交流

2005年10月18日、私は生徒達を率いてアモイ空港に向かい、佐世保高専の第一弾となる交流訪問団の教師・生徒を待ち受けた。その時の気持ちは嬉しい反面、不安でもありました。嬉しいというのは、3年に亘る交渉と準備を経て、両校が正式に友好交流協議書を締結すると共に、実質的な交流活動をスタートしたことであります。心配というのは、我が校の教員・生徒が7月に日本を訪問した際、貴校の行き届いたお世話を受けたのに対し、今回、佐世保高専の教師・生徒が我が校を訪問するにあたり、「こちら側の生活と学習に一行が馴染めるかどうか?」、「私達が制定した交流計画が一行の期待に応えられるかどうか?」、ということでした。私達は実にこうした複雑な心境の下、佐世保高専の教師・生徒をお迎えしたのです。飛行機から降り、アモイの土を踏んだ時の佐世保高専の教師・生徒は、私達と同じように喜びと緊張を感じていることが伝わってきました。しかし、こちらが同じように若々しい笑顔で出迎え、聞き慣れた日本語で話し掛けると、一行の緊張もだいぶほぐれたようでした。アモイ理工学院が準備した交流学習計画書も一行を楽しませ、積極的にさせるに十分なものでした。

その後の活動は変更なく行われ、個別の専門学習や精彩な学術講座が設けられたほか、太極拳の練習、茶道の演技、中国の飲食文化、中秋の餅菓子、等の長い歴史を有する中国文化への取り組みも行われた。また、アモイ及び周辺の観光や中国の家庭への訪問は、アモイが心の温もりのある都市であることを一行に印象付けるものとなった。但し、アモイの交通渋滞、3時間にも及ぶ昼休み、農村の遅れた衛生環境に一行は大いに驚いておりました。こうして、最初の国外体験で中国の発展速度を実感し、中国人の心のこもったもてなしを体験したことは、貴重な経験として未永く一行の心に残るとの思いを深くしております。

11月4日、交流活動は終了となった。飛行場では両校の生徒が抱き合いながら別れを惜しんだ。10日間余りの短い交流において、若者達はお互いに何も知らない状況から親密になり、互いを敬い認め合うようになった。今や若者達の心の中には、ひっそりと友情の花が咲いております。

両校が絆を結んだ証人として、また、交流活動に参加した者として、私は昨年の交流成果に対して喩えようのない喜びを感じております。但し、その一方で、こちらの作業で至らなかった部分があったことを反省しております。こうしたことから、今年佐世保で開催される第1回佐世保-中国国際交流フォーラムは非常に時期に適うものであり、有意義なものであると言えます。同フォーラムは私共がこれまでの経験を総括し、今後の作業をより上手に行う上において、助けとなるものとなります。

最後に、昨年の交流活動について、3点に亘って感想と要望を述べさせていただきます。

第一に、世界の情勢が平和に向かい、国際経済が一体化する状況の下、日中両国はアジアの隣国として更に関係を緊密にし、相互に協力していかなければなりません。目下、両国の間には様々な仲違いの要素が存在していますが、それらは私達の交流を妨げる理由にすることは出来ません。交流、協力、相互提携は私達が共に追及する目標にならなくてはなりません。私達は今後、両校の協力交流がさらに頻繁になり、内容も一層充実し、有意義なものとなることを信じております。

第二に、未来の世界は若者の世代に属しており、二十世紀の美しい明日は若者が生み出すものであります。こうしたことから、私達は十分な条件を整え、若者の交流にしっかりとした基盤を提供していく必要があります。昨年、私達双方で400名の生徒が活動に参加しましたが、今後は交流の定員を拡大し、より多くの生徒がこうした活動に参加することを希望致します。

第三に、国際的視野、国際交流活動、国際的競争力を備えた若い技術者を育成していくことが私達の目標であります。従いまして、今後の活動においては、専門学習交流の内容を強化し、両校のそれぞれの優れた部分を十分に活用していくことにより、生徒が専門学習の中からより多くのことを獲得出来るようにしていかなければなりません。

日中友好は若者によって受け継がれていくことが必要であり、若者の心からの交流が必要であります。私達は両校の協力が豊かな成果に結びつくと共に、両校の発展に活力がもたらされることを望んでおります。私達は心からの交流が互いの隔たりを取り除き、共に美しい明日を創造することが可能だと信じる理由を有しております。

アモイ理工学院

陳 越

2006年1月10日

「アモイ・厦門・X i a m e n 交流記」

学術交流派遣員 機械工学科 森川浩次

1. 厦門理工学院との学術交流

佐世保市と中国福建省の厦門市は、20年以上に渡り友好都市として締結されている。このような背景のもと、本校と厦門理工学院は現代GPというプログラムを通じて双方の学生および教員間の学術交流を行うこととなった。このプログラムの一環として、本校専攻科学生4名と引率教員である私は厦門理工学院へと旅立った。学生の滞在期間は10月中旬から11月初旬までの約3週間であったが、教員は1週間ずつ3名で引率を交代するスケジュールである。私の主な任務は、学生を厦門市まで引率し、学校および市の方々に対する本校のPRである。引率したとえば、格好も付くのだろうが、実際の心の内は「無事、連れて行くことができるのか」と不安もあった。



2. 中国の大地

私たちは福岡空港から関西国際空港へ飛び、一泊したのちに直通便で厦門国際空港へ向かった。キャビンアテンダントとの会話では日本語が通じる環境であったため、終始リラックスできるフライトであった。機内では時間を忘れて中国語会話のレッスン。良く利用するであろう会話表現をQ&A方式で質問しあう猛特訓を行った。日本で活躍しているある外国人テレビタレントがこのようなことを言っていた。「目的地に到着するまでの機内での語学レッスンが最も効果的である」と。私も佐世保で自学自習していたものの、この機内での集中力たるや、自分でも驚いた。

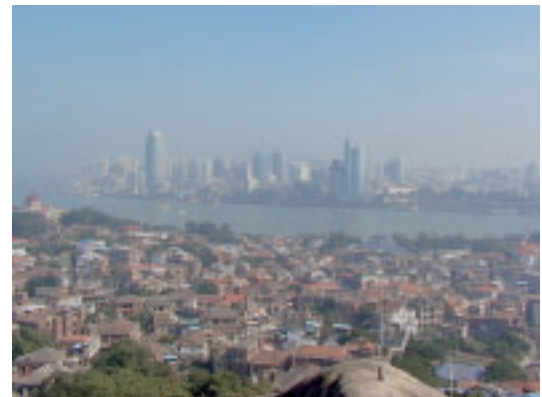
厦門国際空港への着陸態勢に移ったことを、耳がツンとなることで知った。旋回中の窓から見えた大地は、もう中国である。

夏に佐世保を訪れてくれた学生の陳さんらが空港の到着口で私たちを出迎えてくれた。彼女らは日本語も流暢なので、緊張感もなく中国の大地に降り立つことができた。空港から厦門理工学院までの車中ではお互いの自己紹介を兼ねて、機内の猛特訓の成果を披露したものの、自分の発音の悪さを思い知らされた。

3. 厦門という街

厦門の観光案内によると人口は125万人。しかしさらに125万人程度、外国人が滞在していると言われる。厦門市は、中国に4都市ある経済特区の1都市である。市の中心部へ向かえば、人口湖の周辺には外資系銀行などの高層ビルが建ち並んでいる。そして巨大なホテルと会議場、市役所が建っている。日本の市役所とはスケールが異なり、経済特区の市役所は、日本の県庁と同等な存在であることを伺った。

私が楽しみにしていたのは、沖に浮かぶ美しい島、コロンス(鼓浪嶼)島である。一日だけ観光することが可能であったため、この日までは体調を崩すなどもってのほかであった。島には観光船で渡った。そこには西洋風の赤い屋根瓦で統一された人家、白い砂浜、島だけでなく厦門市まで一望できる日光岩など、本格リゾート地である。仕事も忘れ、学生とともに即席で覚えた中国語「ピ



コロンス島より厦門市を観る

ャオリヤーン（美しい）」を連呼してしまった。

食事は、心配無用であった。日本からの客人ということで高級レストランに招かれたが、自分たちで開拓した料理店や学生食堂においても、食事はおいしくいただけた。また、味わったことのない（日本ではあまり食べない）食物もおいしく味わうことができた。人が生きていくためにはチャレンジ精神は必要である。毎日の旅程がハードであったこともあり、とにかく食事はきちんと摂ることを心がけた。その結果、私が滞在した一週間で私の体重は3kg増加し、体脂肪というお土産まで日本へ持ちかえることとなった。

4. 厦門理工学院

市の中心部からバスで10分ほど離れた場所に厦門理工学院はある。学生の総数に対して土地が不足していることは、その人口密度を見ればすぐに理解できる。新たにキャンパスを建築している理由もうなずける。私たちが受けた学内見学および授業では、教育に関する設備などを中心に見せていただいた。いずれの教育設備も新しく、学生は興味を持って学びやすい環境であった。私が興味を抱いたのは機械工学の空圧実験キット。学生はPCを利用して空圧装置をシミュレートし、動作を確認する。次に、実際にその装置をブ



空圧実験キットで学ぶ

ロック遊びのように組み立て、シミュレーションどおりに動作するか、実習を行う。装置に問題がある場合には、自らで考え、問題を克服する力を養うことができるシステムがあった。近頃の日本人学生の意欲のなさに愚痴などをこぼしている暇もなく、本校への早速の導入を検討し、提案しているところである。そのほかにも、私が以前から注目していた三次元レーザ測定装置など、日本製の最新マシンなどもすでに導入されていたのだから、驚かざるを得ない。

5. 厦門の人たち

会話と呼ぶにはほど遠い私の中国語では毎日の生活も不安である。しかし厦門理工学院日本語学科の学生から発せられる流暢な日本語のおかげで、本当に多くの人と交流することができた。私たちは、初日から積極的に彼らに話しかけ、わからないことは筆談によって教わるという学習スタイルでみるみるうちに中国語会話をマスターできた、気がする。特に毎日使う言葉である挨拶などは繰り返し学習できるため、私が帰国するころには自然に口にすることができるようになっていた。

このように短時間で語学が上達でき、文化・習慣などを学習できたのも、ひとえに通訳として接してくださった厦門理工学院の学生そして教員の精神的な明るさにあるように感じている。自分の考えたこと、感じたことは、はっきりと伝えてくる。楽しいときは大いに笑い、悲しいときは大いに泣く。このような人間にとって当たり前の行動こそが、人と人との交流には不可欠であることを改めて知らされた。

わずか数日間の滞在であったが、この学術交流を通じて、言葉には言い表し難いとても大切なものを感じ取ることができるようになった。引率した専攻科学生4名の人生を豊かにすることができていれば、これに勝る成果はないであろう。最後に、このような機会を与えてくださった関係各位に感謝するしだいである。

「厦門理工学院との学術交流について～中国滞在記～」

学術交流委員 物質工学科 渡辺哲也

先の平成17年7月19日から8月5日までの約3週間にかけて、厦門理工学院より2名の先生と4名の学生が本校において学術交流が行われたが、これの交換交流として、平成17年10月17日から11月5日にかけて本校専攻科生が厦門理工学院にて学術交流を行った(現地での滞在期間10月18日から11月4日)。引率として本校から3名の教員が約1週間交代で現地へ行った。その中で私は第2週目に引率を行った。そのときの交流の様子や感想を報告する。



10月23日の午前中の便で関西空港を立ち、昼過ぎに厦門空港へ到着した。厦門理工学院の方に出迎えて頂き、そのまま車で同校へ案内された。この日は日曜日のため授業は休みだった。また、日本からの先発隊は泉州観光の案内を受けていたため、同校敷地内の宿舎で休憩しながら彼らの帰りを待った。

彼らが戻ってきてから現地の案内の方と一緒に近くの食堂へ夕食に出たのだが、食事の内容(種類、味付け等)に特に驚きはなかった。私が一番驚いたのは、日本からの学生たちが現地の言葉や習慣に対して非常に積極的であるということだった。わずか一週間でかなりの言葉を理解しているし(私にはそう感じた)、理解しようと努力していた。引率の森川先生も同様であった。正直なところ、私は言葉などもほとんど勉強していなかったため、彼らの姿勢を見て反省させられた。また、今回はよい学生が参加してくれたと感じた。

日本を出発前に、日中間の政治的問題が再燃し、正直言って、かなり不安なものがあった。しかし幸いにして厦門では全くと言って良いほど、そのような心配は無用なものであった。逆に関係者以外の方々も非常に友好的であったように感じた(先に到着した森川先生は、最初に挨拶に言った市役所で、少し不快な思いをされたようであるが)。少なくとも、私自身は今回の交流の中で政治的な問題や過去の戦争問題等で不快に感じることはなく、非常に有益な一週間を過ごすことができたと感じている。

私にとっての出発前のもうひとつ不安は「酒」であった。私は正直言ってあまり得意ではない。歓迎会等の席ではどうしても飲まなければならないだろうし、中国の酒は「強い」と聞いていたので、どうやってこれを逃れようかと考えていた。しかし、幸いにして酒を「強要」されるような場面には出くわさなかったのが良かった。

「食べる」ほうはあまり心配していなかった。というより、こちらはどちらかといえば「拍子抜け」というか、とりたてて「これは勘弁してくれ」と思うようなものには出くわさなかった(私が中国入りする前に招待された場所では、多少そういうものもあったようであるが、私が遭遇したのはせいぜい「虫」の入った寒天くらいだった)。四川料理を口にする機会はなかったのだが、「辛さ」も期待したほどではなかった。また、通常は「学食」で食事をとったのだが、そこでの味付けも特に日本人には合わないというものではなかった。こちらから行った学生たちも、特に気にしている様子ではなかった。

私が滞在中に受けた研修は、「機械科のCAM, CNCの講義・研修」、「中国食文化研修」、「日中文化交流セミナー(漢字交流の観点から)」、「中国お茶文化研修」、「黄校長セミナー(中国自動

車産業について)」、「太極拳」等であった。観光では「万石植物園」、「漳州(土楼見学, 温泉)」, 「鼓浪嶼島」等を案内して頂いた。また, 私が講師となるセミナーも行われた。先発の森川先生が日本や佐世保および佐世保高専についての紹介を行ったので, 私はそのあたりは気にせず, 自分の研究に関することを簡単に紹介した。電気エネルギーに関することだったので, 電気科の学生が聴講した。日本語科の先生に通訳をして頂いたのだが, どうしても専門用語が入ってくるため, かなりご苦労をかけた。

厦門理工学院との交流に当たり, 化学系の学科がないために, 本校物質工学科・専攻の学生の交流の有用性を疑問視する声もあったようであるが, 本交流を終えての私の考えは「全く問題なし」である。私の滞在期間中に受けた技術的な研修は機械科のものだけであったが, そのときも物質工学専攻の里見さんは非常に興味深く, また積極的に研修を受けていたし, 物質工学科の教員である私自身も機械科系の装置等は珍しく, 研修内容は非常に興味深く, また楽しく感じた。本校専攻科の特徴は「複合型」教育である。他専攻の専門の講義を受けることにより, 「複眼的かつ実践的能力」を身につけることを教育目標に掲げてある。実際, 他専攻の講義や演習・実験を受けることにより, そうした能力を養うプログラムは組まれており実践されてはいるが, そういった各専攻の学生が同時に受講できるものは, 当該専攻の学生にとっては, 正直言って物足りないものとならざるを得ない(当該専攻外の学生にとっては未知なことでも, 当該専攻の学生にとっては当たり前なこと, となるような講義とならざるを得ないところがある)。厦門理工学院は前身は日本でいう「職業訓練校」的なものと聞く。そのためか, 就職後, 直接役に立つような技術を得るための装置が多いように感じた。これを体験することは関係科専攻の学生にとって参考になることはもちろん, 直接的には関係がなさそうな物質工学専攻の学生にとっても, 非常に有用である。本校で他専攻の科目(実習・実験)を受講し, そこで基礎的な知識と装置についての知見を持った上で, 更に実践的な装置に触れ研修を受けることにより, 「複眼的かつ実践的能力」がより身につくものと考え。そして何よりも, 専攻の種類にかかわらず, 実際に中国の地を踏み, 現地で中国人と交流し, その文化を学ぶということは, 今後の人生の中で有益に作用することは疑う余地はない。特にこれからの日本を担う技術者となる者にとっては, 中国を無視することはできない。そうした観点からも, 本交流事業は学生にとって学科・専攻にかかわらず, 非常に重要かつ有益なものであると考える。

現地での交流事業の中で, 私が特に興味を持ったのは「お茶文化研修」であった。お茶の種類や作法を教わり, 数種のお茶をいただいた。その味の不思議さに感銘を受け, 思わず「石菊茶」という種類のお茶と, 携帯用茶器セット, 茶具を買ってしまった(我ながら衝動買いをしてしまったと思っている。が, 後悔はない)。また, 漳州的「土楼」見学は, うまく表現できないが中国の歴史を感じた。それから, 中国では入浴の習慣がないように聞いていたが「温泉」は日本と同じような感じだったので, ゆっくりお風呂につかれて良かった(宿舎ではシャワーのみ)。もともと, 女性用は日本のものとは少々違ったようであった。

私の滞在中のその他の交流では, 「外国語学科の先生方との夕食会」, 「日本語学科学生主催の交歓会」等があった。個人的には, 時間の都合で1回だけであったが, 夕方から職員の方と一緒にサッカーを楽しんだ(急にやることになったので, 近くのスポーツ店でサッカー用のストックキングを購入, もちろんスパイクなど持って行っていなかったので運動靴でやった。皆さん, お上手だった。私は技術はないので「運動量で勝負」でした)。「学生の交歓会」ではパーティ等のと

きに行うお互いの国のゲームを紹介し合って楽しんだ(私もゲームに引っ張り出されたりした)。非常に盛り上がり、そこでは日本と中国の国と国ではなく、人と人との交流があった。彼らによる、この人と人との交流が発展することにより、国と国とがうまくやっていくことにつながっていくのだと、期待を感じさせる会であった。また、夏に日本へやってきた学生4名が夕食を接待してくれた日もあった。夏からの交流がずっと続いていることを感じ、うれしく思った。

その他、私が持った感想を少し述べると、他の学生もみんな言っていたのだが、「交通事情」には驚かされた。噂には聞いていたが、実体験すると「絶対に中国では車の運転はできない」と確信した。まるでみんなが「チキンレース」をやっているようだった。横断歩道は「道路に線が引いてあるだけのもの」というとらえ方なのだろうか、そこで車が止まることはまずなかった。歩行者は車の流れの切れ間を見て、渡れるところまで渡り、道路の途中でまた車の流れが切れるのを待つ。これを繰り返して反対側まで渡っていくのである。車の「ウィンカー」など、あつてないようなもの。赤信号も歩行者がいなければ「GO」である。片側三車線あるような大きな道路の交差点でも、信号機がないところはざら。ここではまさに先ほどの「チキンレース」である。幸いにして私が滞在中は事故等には遭遇しなかったが、やはり事故は多いようである。この事業が続き、派遣学生にアドバイスするときは、まず、このことを注意したい。

トイレは日本人の特に女性にとっては、大変かも知れない。ホテル等設備の整ったところでは問題ないようだが、公衆トイレや田舎のトイレ等は要注意である。私自身はそのようなところを利用しなかったので問題なかったが、噂通り扉がなかったりするようである。

最後に、今後交流の参加を希望する学生へアドバイスをするならば、やはり何事にも「積極的」になってほしいと願う。正直なところ、私は「行かされる」という受け身の考えで行った。ところが現地に到着すると、派遣学生はもちろん森川先生までも非常に「積極的」であると感じた。いろいろな言葉を話そうとするし、向こうの和の中に入っていきこうとする、吸収しようとする、というような姿勢が感じられた。この、私との姿勢の違いは、明らかに彼ら自身が得たものに現れたに違いない。私はもったいないことをしてしまったと、今は感じている。せっかくの機会である。いろいろな「中国」を吸収して欲しい。そのために、ぜひ「積極的」になってほしい。

今回の交流は、良い学生が参加してくれたことも、また、現地の方々も大変友好的であったこともあり、非常に有意義なものであったというのが、率直な感想である。次年度もこの交流は続けられることであるが、多くの学生に参加して(厦門へ行く側としてだけではなく、受け入れ側としても)、更に充実した交流へと発展することを願う。



学校敷地内の運動場。サッカーをしました。

日本に来た学生が食事を招待してくれました。

「厦門理工学院訪問記」

学術交流派遣員 電子制御工学科 前田貴信

平成17年10月28日から11月4日までの8日間、厦門理工学院に交換留学生の引率役で滞在した。本稿では、滞在期間における厦門理工学院との交流や企業見学、観光などについての感想を記す。



1. 厦門理工学院との交換留学について

厦門理工学院には、本校専攻科生4名が10月初旬からおよそ4週間留学し、その間、専門科目の授業を見学したり、日本語科学生と交流したり、観光や企業見学といった行事を行うもので、引率教員は1週間毎に交代で、私は最後の期間を受け持った。私が厦門に到着したときにはすでに約2週間滞在していたため、学生らはすっかり現地にとけ込んで多くの友人も作り、毎日楽しく行事をこなしていた。私が到着してからの行事は、企業訪問4社、厦門市郊外の歴史施設の見学、日本語科学生宅への訪問、送別会などであった。

2. 厦門理工学院の学生、および教職員との交流について

学生との交流は、厦門に着いたその日に日本語科3年クラス全員で歓迎会（お菓子と水で健全なパーティ）を催してくれたので、早くに親密になれた。また、毎日2名交代で通訳として日本語科学生が行動を共にしてくれたので、自然に会話を重ねることができた。非常に熱心で、会ったその場から、いろいろな質問してくる学生が多く、話題に不足しなかった。ただ、日本語を勉強しているとはいえ途中なので、発音や表現などの細かな使い方などにやや不慣れな場合が多かったので、わざとゆっくり話したり、言い回しを変えてみたりなどの配慮が必要であった。

教職員との交流は、最終日近くの2度の送別会（酒宴）があった。電子工学科の教員主催で四川料理と、理工学院の上層の方々主催で、校長、副校長、事務関係の方々とで高級な食事とお酒を頂いた。校長先生は教育のほか、日本の政治・経済の話もされるので、日本語・中国語に英語が入り交じった不思議な酒宴であった。この場で、中国特有の上下関係、付き合いの仕方などを見たような気がする。

3. 厦門市内の企業訪問

厦門市は厦門島とその周囲の中国本土からなるが、中心部である厦門島には工場はない。今回訪問した企業は4社で、いずれも厦門島から本土に渡った工業地域にある。訪問した企業は順にTDK厦門工場（TDK台湾とTDK日本の合弁会社）、国営のショベルカー工場、イタリア系のフォークリフト工場、金型製作会社である。

TDK厦門工場は主にフェライトコアなどの磁石やコンデンサなどを生産している。日本人は技術に数十人いるだけで、厦門やその周辺の地区からの労働者が働いている。工場そのものは日本とそれほど変わらないが、食堂や寮などの福利厚生施設が前近代的（たとえば、寮は8人部屋）なことに驚いた。まさに人海戦術で、この体制にはすぐにはなじめないと思った。ショベルカー工場とフォークリフト工場はともに中国国内の建設現場や工場などで使用する重機を生産して

いるが、どちらとも工場の規模の大きさが目を引いた。が、両工場とも手作業の行程が多いのが目についた。

金型製造会社では受注した金型の相当数は日本企業からのもので、テレビや自動車のプラスチック部分などがあつた。注目したのは設計部で、3次元CADには本校で今年度から採用したPro Engineer を利用していた。このCADは中国国内で半数以上の企業が利用しているらしく、理工学院の機械工学科では授業ですでに教えており、事実数名の卒業生が働いていた。いずれの企業も就職やインターンシップ先としては不向きだが、工場見学としては日本と比較してみるなど、おもしろいかとも思う。

4. 観光など

観光旅行として、厦門市から車で約4時間程度かかる、内陸部のいわゆる田舎に出向いた。主な目的は「土楼」と称される、土壁でできた古いドーナツ状の集団家屋であつた。戦国の世に外的から町を守るために高い城壁をドーナツ状に作り、その内部に家屋や学校などを設け、中心の屋根がない部分には井戸や洗い場などがあつた。歴史文化財に指定された、とても興味深い建築物であつたが、それ以上に驚いたのは、その地区と厦門との経済的な格差であつた。内陸部が沿岸地区に比べて貧しいとは聞いていたが、厦門市が高層ビルや自動車が多い近代的な都市であつたのに比べ、内陸部は家屋が煉瓦の平屋建てで道路の舗装もあまりされておらず、産業はお茶や山一面のバナナなどの農業しかないようであつた。観光で中国の内情を目の当たりにしたのだが、多少の困惑は禁じ得なかつた。

学生や先発の2教員はすでに厦門でもっとも有名な観光地・コロンス島へ出かけていたが、私はその予定がなかつた。そのことを日本語科の女子学生2名に話してみると、半日自由行動の日にガイドを申し出てくれた。大変ありがたかつたが、彼女たちの弁では、日本語を實踐できる時間が増えて嬉しかつたそう。この時が最も理工学院の学生らの熱心さを感じた。

観光ではないが、日本語学生宅に訪問させてもらったのも良い体験であつた。厦門市郊外の男子学生宅は高級マンション街にあり、家具や電化製品も裕福さを物語っていた。学生らは日本のゲーム機で対戦して十分に楽しんでた。たまたまその男子学生が誕生日だったので、父親の本格的な中華料理とともに簡単ながらパーティーも行い、中国の家庭の雰囲気をついといろいろと見せてもらった。

3. 全体の感想

中国は近くて遠い国というイメージがあつたが、理工学院の特に日本語科の学生のおかげで全く不自由なく過ごすことができ、それでいて報道でしか知らなかつた中国の内部事情を垣間見ることができたのは本当に良い経験であつた。食事は一部を除いて満足だつた。

今後この事業を発展させるためにはどうしたらよいかについて、最終日のミーティングで意見を交換したが、佐世保、厦門どちらにおいてもお互いの文化、生活習慣をあらかじめ考えたスケジュールを立てておくことが最も肝心に思われた。また、日本担当の陳先生が、引率教員が3交代であつたためスケジュール作りや送迎で苦勞した、という意見を出された。その他、もう少し授業に参加できる時間が欲しいという話もでた。そのためには共通の言語、つまり英語で授業を行う必要がある。

また、歓迎会・送別会の豪華さが理工学院の方が上だったのは訪問した者たちにしかわからないことかと思うが、連日豪勢な食事をごちそうになった(朝は学食だったが)のは予想外で、恐縮至極であった。金銭的な問題ではあるが、考慮して頂きたい。

以上、思いつくままに感想を述べたが、冒頭に述べたように訪問前の不安を十分に払拭する、大変有意義な滞在期間であった。私事ではあるが、渡航前に頸椎を痛め、活動に不自由をきたしていたのが残念ではあったが、それでも貴重な体験を非常に多く味わうことができ、満足であった。



「厦門感想文」

専攻科 機械工学専攻 2年 井村洋平

僕の中国に行く前のイメージは、国民はほとんど自転車かバイクに乗っていて、家に鶏を何匹も飼っていて、あまり規則に縛られず、のびのびと生きているというものを想像していた。しかし、その僕のイメージは中国の田舎の農村などの方で、今回行った厦門などの都市は、もうほとんど生活は日本に近いと感じた。

生活面で日本と違うところと言えば、朝ご飯の主食はお粥かパンで、白飯はないこと。そして、昼休みがとても長く(3時間くらい)、その時間は基本的にみんな昼寝をしていることだ(先生も)。朝からお粥というのはなかなか消化も良く、朝はいつも食べない僕でも、お粥なら食べやすくよかった。日本に帰ってからも3日間くらい朝ご飯はお粥だった。あと昼寝の習慣は、昼ご飯を食べた後は眠くなるので、いいと思う。日本に帰ってからも1週間くらい昼寝の癖から抜けられなかった。あとはほとんど日本との生活面の違いはないと思う。理工学院の学生の家ホームステイに行ったのだが、リビングはソファがあって、大きなテレビもあって、まるで日本のきれいなリビングと同じような感じだった。

観光にもたくさん連れていってもらった。というか見るものすべてが新鮮で、毎日が観光のようなものだった。まず、車の運転がみんな荒いこと。そして、その車に対して人も負けず劣らず向かっていくこと。譲り合いというものがない状態だった。自動車学校では何を教えているのだろうと思った。でも、クラスの人に事故した人いますか?と聞いたら誰もいなかった。あまり事故は起きていないのだろう。不思議だ。観光地はどこも、壮大で、美しかった。特に僕が印象に残っているのは、漳州の土楼だ。土楼というのは敵から集落を守るために、その集落を丸い塀で全周囲っているものだ。圧倒的で、すごかった。よくこんなものを建設出来たなと思った。漳州は厦門に比べるとものすごく田舎で、僕が中国に行く前にイメージしていた中国そのものだった。そこでは、ノーヘル3ケツがスタンダードで、農業を主な仕事としており、みんなのんびりと暮らしているような雰囲気だった。洗濯も川でしていた。僕もこんなところで何も考えず3週間くらいのんびり過ごしてみたいなと思った。また、コロンス島という



様々な文化が混合している島に行ったり、歴史のある寺などにも行った。きれいだった。

また、買い物にも連れていってもらった。中国はとにかく物価が安い。僕は日本の10分の1くらいではないかと思った。そして、偽物も数多く当たり前のように売られていた。普通の靴屋さんのスポーツブランドのスニーカーはおそらく全部偽物だ。僕は偽物プーマのスニーカーを750円で購入した。意外と履き心地はよかったが、日本で1週間ばかりはいていたら壊れてきた。これこそ安物買いの銭失いだと実感したが、まあいい。モノより思い出。商店街にある食事をするところも安く、なかなかおいしかった。ケンタッキーやマクドナルド、ピザハットなどもあった。3つとも行ったが、値段は日本よりちょっと安いくらいで中国人には、おそらくファーストフードは高い食事だろうと思う。DVDやCDも驚くほどの破格で売られていた。DVDはまだ日本で出していないものなどがあり、たくさん買った。

豪華な中華料理もごちそうになった。春雨じゃない本物のフカヒレスープ、北京ダック、でっかいエビ、そして定番の餃子や麻婆豆腐などなど、ここでは全部上げられないほどたくさんの種類の料理を食べた。どれもものすごくおいしかった。ビールもたらふく飲んだ。中国のビールはなかなかおいしい。寒天で固められた虫や鳥の足、鳥の舌も食べた。まずくはないがうまくもなかった。食事関係を総合してみると中国で食べれないモノは僕にとってあまりなかったように感じられる。

今回の短期留学が楽しくそして充実したものとなったのは、やはり、理工学院の先生方や、日本語学科の学生さんが親切にいろいろなお世話をしてくださったおかげである。本当に感謝したい。中国に行く前は反日感情がすごかったらどうしようなどと思っていたが、僕と接してくれた人たちは、そんなことはなく親切だった。僕が中国語の発音を練習していて、何回間違えても中国語を根気強く教えてくれたし、僕が風邪を引いたときも、心配してお粥なんかを買ってきてくれたりした。ただ、太極拳の先生は僕にだけ厳しく、5回同じことを教えても僕が覚えなかったため、おもいきり蹴られたりした。とにかくこの短期留学は僕の一生に残るいい思い出になった。ここで出会った人たちと今もたまにメールの交換をしていて意志疎通を図っている。こうやってこれからも世界に友達がどんどん出来てくればいいなと思う。



厦門研修報告書

専攻科 物質工学専攻 2年 里見暢子

中国に到着して最初の印象は、すべての規模が大きいということだった。小さな島国に住む私には聳え立つ山々、道幅、川、建物すべてが大きく感じた。また、厦門理工学院の日本語科の学生が熱心に通訳してくれたおかげで、言葉に関してはまったく問題なかった。

厦門理工学院では、旧校舎に2・3年生、新校舎に1年生が通っており、朝8時から夜9時まで講義が行われていた。機械科でCAM、CNCなどの操作実習を行ったが、仕事に直結した講義内容だった。私たちに対する講義は英語を交えて行われ、機械科以外の学生でも興味を持つことができる内容だった。また、学生の英語能力が極めて高いと感じた。中国では化学や生物関連の研究は活発ではないようだ。しかし、理工学院周辺の書店には化学関連の専門書が販売されており、化学工学など日本とほぼ同じ内容が書かれていた。

理工学院の新校舎は建設中で、一部分しか見ることができなかったが、広大な土地が用意されており、旧校舎の10倍の面積の校舎が建設されるということだった。また、厦門市内にある厦門大学や集美大学も新校舎が急ピッチに建設され、中国の教育に対する意識の高さが伺えた。

課外活動で習った太極拳は想像以上にハードで、太極拳の翌日は筋肉痛に襲われた。基本の形24種類を習得したが、その他にも様々な形があるということだった。現在、太極拳は老人が行うのみで、若い人たちは行わないようである。放課後は10月下旬に行われる体育祭に向けて、行進やラジオ体操らしき集団体操の練習が学科ごとに行われていた。

休日には、厦門市内の鼓浪嶼島や万石植物園、福建省の泉州、漳州などをめぐった。鼓浪嶼島はヨーロッパ建築が入り混じり中国とは思えない風景で美しかった。南普陀寺など中国建築の古い寺院や建築物には圧倒された。その中でも印象的だったのは、漳州的土楼である。土楼は円形の集合住宅のようなつくりで、井戸なども完備されていた。そして、極めつけはトイレだ。学校や空港など、厦門市内は近代化した普通のトイレであった。しかし、漳州ではトイレにドアがなかった。他に



厦門市役所付近



厦門市内 夜店

も、泉州の寺院では仕切りやドアが腰あたりまでしかなかったり、公衆トイレは有料で一人5角払う所もあった。中国の農村でのトイレ事情は、渡航前から聞かされていたが、良いトイレ経験が出来た。

日本と中国で大きく異なる点は、食文化である。中国で一番初めに食べた料理は、前菜の鶏の足だった。かなり驚いたが、食べてみるとおいしかった。中華料理は北の地方ほど辛く、南の地方ほど甘い味付けのようである。厦門地方の料理は日本人に親しみやすい味付けだった。四川料理にも連れて行っていただいたが、予想していたよりも辛くなく食べやすかった。

中国では、朝はお粥、昼と夜は外食する家庭が一般的なようである。この背景には、夫婦共働きという中国の家庭事情がある。マクドナルドなどのファーストフード店、ピザ屋、日本料理店もあったが、外資系の飲食店は比較的料金が高く、一部の学生以外はファーストフードを食べることはできないようだった。

中国では女性がとても活発であった。これも日本と大きく異なる点である。中国では、夫婦共働きが一般的で、理工学院でも多くの女性教員が活躍されていた。佐世保高専では女性の割合の少ない機械科でも、多くの女性教員や学生が在籍していた。結婚後も女性が仕事をやめる習慣はないという。

もちろん活発なのは女性だけではない。5年後の厦門市内は想像がつかないほど、あちらこちらで高層マンションや学校の建築が行われており、街中に活気があふれていた。厦門の人々はとても友好的で、外国人に対しても偏見なく接してくれた。街で買い物をしている、中国語が話せないとわかると英語で話してくれたり、とても過ごしやすい街だった。機会があれば、また厦門を訪れ、3週間共に過ごした理工学院の先生方や学生と再会したいと思う。

最後に、3週間という短い研修期間でしたが、貴重な経験と国境を越えた多くの友人ができました。多くの人に支えられ有意義な研修となりました。この場を借りて謝辞の意を表し、深く御礼申し上げます。



毎週水曜 日本語クラブ



宿泊した鷺江酒店前

「アモイでの研修を終えて」

専攻科 機械工学専攻 2年 高木大介

10月18日から11月4日までの約3週間におけるアモイでの研修は日本では体験できないようなことが体験でき、とても有意義で思い出に残るものになった。日本を発つ前から、最近めざましい発展をとげている中国の工業の技術力には興味があった。アモイ国際空港についてすぐに発展の勢いというものを感じることができた。それは空港からアモイ理工学院に行くまでの間に、たくさんの建物や高いビルが同時に建てられているのを目の当たりにしたからである。また日本と中国では道路の交通事情も違うということがすぐにわかった。日本では信号の表示を守り歩行者優先であるが、アモイでは道路の大きさの割には信号も少なく、交通の少ないところでは信号無視は普通である。一番違うところは歩行者優先ではないところで、特にバスとタクシーは人が横断していてもスピードを落とすことなく走ってくるので注意しなければならなかった。しかし、こんな交通事情でも3週間で1回しか交通事故は見なかった。

このような発展のなかでも、古くから伝わる文化を残しているのも中国の特徴だと思う。理工学院の近くには南普陀寺、泉州には開元寺、漳州では昔の農村の人たちが建てた集合住宅である土楼を見学することができ、街のいたるところでは中国茶を飲みながら談笑する人たちの姿を見ることができた。またいろんなものの物価も日本に比べればはるかに安く、買い物を楽しむことができた。とくに中山路の夜店は偽物だらけでおもしろかった。しかし中山路で買ったおみやげを入れるためのスーツケースは関西空港で壊れた。バス代はアモイ市内なら1元（15円）、料理も日本に比べると低料金でお腹いっぱい食べることができた。そのためアモイでの生活に慣れてくると、アモイにあるマクドナルドがとても高く感じるようになった。もちろん日本では食べることのできない中華料理（鶏の舌、鶏の足、海の虫、アヒルの足）を食べることができたことはとても貴重だった。

理工学院においてはさまざまな授業を受けた。機械の授業では、楽しみながら理論を理解できるとも効率的で良い授業だと感じ、また日中文化交流のセミナーも受講することができ、日本と中国の昔からの関わりを学ぶことができた。放課後には太極拳を教わったりもした。工場見学ではフォークリフトやショベルカーを作っている工場などに行ったが、工場内でタバコを吸う人がいたことや、ヘルメットを誰も被らずに作業していたことには大変驚いた。

3週間の滞在の中で一番印象に残っているのは、中国の人たちの元気良さと自分の意見をストレートに伝えるところである。元気の良さはご飯をたくさん食べ、効率よく休憩をとる中国人の生活スタイルからきているのではないかと思う。昼



寝を2時間もできる生活はとてもよかった。また日本語学科の人たちと話す機会がたくさんあったが、中国の学生は自分の意見をストレートに伝えてきた。そのためいろんなことを本音で話すことができたことはとても良いことだったと思う。おかげでたくさんの友達を作ることができた。他には日本人はありがとうを言いすぎだと指摘を受けたこともあった。

中国の友達とはこれからもメールのやりとりなどを続けていきたい。そしてまたアモイをぜひ訪問したい。また今回の訪問でかなり満足させてもらったので、来年理工学院生が佐世保を訪問する際に満足してもらえそうなプランを立ててほしい。



「厦門研修報告書」

専攻科 機械工学専攻 2年 力石賢一

今回私は、佐世保高専と姉妹校である中国の厦門理工学院との交流の一環として行われる、交換留学に参加させて頂いた。一緒に行ったのは機械工学専攻の井村君、高木君、そして物質工学専攻の里見さんである。引率をしてくださったのは、機械工学科の森川先生、物質工学科の渡辺先生、そして電子制御科の前田先生である。このメンバーで唯一共通しているのは、「海外に行くのが初めて」という点である。海外経験が無いメンバーでの中国行きは、多少心配だった。さらには、中国で起こっていた反日デモ、そして中国渡航直前に行われた小泉首相による靖国神社参拝など、この中国行きには不安だけが募っていた。だが中国に着くと、未知の土地への期待、そして小さな島国である日本と、大陸に広がる広大な中国との、建物や道路など全てのものの規模の違いに驚き、不安に感じていたことを忘れてしまった。

初めての中国では、様々なことに驚かされた。まずは、交通状況である。前もって行われた中国の講習会で、「中国の車の運転は荒い」と聞かされていたが、実際に乗ってみると、聞かされていた以上に荒かった。まずは少しでも遅い車がいるとすぐに追い抜こうとするし、横道から大通りに入ってくる車に対しては、大通りを走っている車が減速して、入れてやらないと衝突してしまう。人と車とを比べると、車の方が優先という感じがあるため、道路を横断する人は車が来ると、例え中央線であっても立ち止まって、車の列が途切れてから横断しなければならない。日本では考えられないほど恐ろしい交通事情に、空港から理工学院までの約30分間は、全員で騒ぎ続けていた。最初はこのように恐ろしかった道路もやはり慣れてしまうもので、車すれすれの位置で待つことも平気になり、日本では絶対にしない、「6車線横断」もできるようになってしまった。

理工学院の現キャンパスは、予想よりも狭かった。このような場所であるような人数と一緒に勉強できるのかと思ったが、カリキュラムが上手く組んであるらしく、心配ないようだった。現在建設中の、集美にある新校舎の見学にも行ったが、その規模は、現キャンパスの比ではなかった。ただ、キャンパスの周りはまだあまり開発が進んでいないので、店などが本当に少なく、学生達も、少し不便だと嘆いていた。

中国で主に心配していたことは、「言葉」と「食事」である。「言葉」の方は、理工学院の日本語学科の人たちが通訳をしてくれたので、ほとんど不自由は無かった。いつもお世話をしてくれていたのは3年生で、つまりは、日本語を2年間だけしか勉強していないのである。それにも関わらず、日常会話でほとんど不自由をしないほど流暢な日本語を使っていたので、いつも感心させられた。

「食事」は、理工学院の食堂が中心であった。私達は本場の中華を食べたわけだが、まず感じたのは、「あまり油っこさを感じない」ことであった。見た目はほとんど油を通してあって、いかにももたれそうな感じであったが、やはり日本の油とは違い、本



理工学院の図書館と事務所

当にあっさりした油だった。こういうと失礼だが、中国の水の質はあまり良くない。以前、野菜を煮るときにも、水に油を張り、そこに野菜を入れることで、油の膜を表面に纏わせ、水の臭みがかからないようにしていると聞いたことがある。このように、油を常に取り続けるためにも、体に負担をかけないようなものを使う習慣があるのではないかと感じた。また、烏龍茶には、油を分解する効果があると聞く。中国では、日本人が日本茶を飲むように、烏龍茶をよく飲む。このことも、油をよく使う中国ならではの習慣なのかもしれない。

理工学院では、機械工学科や電気工学科の校舎を案内して頂いた。教材の中には、歯車や様々な機構の模型、油圧の論理回路の簡易キットなど、ただ理論を学ばせるのではなく、「実際に目で見て、自分の手で扱って学ぶ」という教育をされていた。理論だけだと、頭では想像しきれない部分がどうしてもでてくる。その点、実際に目で見て扱う教育は、自分の理解したことを確認することができるし、もし間違った理解をしている場合は、それを訂正することもできる。このような機材は、積極的に導入するべきだと思った。また、理工学院では企業と提携し、実際に製品の注文を受けて、製品を作っているらしい。企業で即戦力となる人材を育成するためには、これ以上の教育は無いような気がした。佐世保高专で最近導入した3D-CAD (Pro-E) もすでに導入されており、CAMの演習も早くから行われていたようである。実際にCAM演習をさせて頂いたが、自分で作成したプログラムを基にして、パソコンのディスプレイ上で加工が行われている様子を確認することができるため、実際に材料を加工する必要が無く、その分コストを抑えることができるという企業が望んでいることを、学生時代から学ぶことができると改めて感じた。

中国では、色々な観光地に連れて行って頂いた。厦門にあるコロンス島や万力植物園、泉州にある開元寺、漳州にある土楼など、とても美しく、そして歴史を感じるものを色々と見ることができた。泉州に行った際、ある博物館に行った。そこでは中国と日本、特に琉球との貿易の歴史が細かく説明されており、中国と日本の間にある関係はとても密接で、そしてとても古いものだというのを、改めて感じさせられた。

理工学院では数回セミナーが開かれ、そこで日中の文化や交流に関する話もあった。その中で、「文字」についての話もあった。私は、漢字を用いた文字は全て中国で生まれ、そして日本に入ったのだとずっと思っていた。しかし「科学、貿易」などの漢字は、明治維新後の日本が西欧の文化を取り入れている際に生まれたもので、そして中国で現在使われている漢字の中には、日本から入ってきたものもあるということも知ることができた。

中国の習慣の一つとして、「昼休みが長い」ということがあげられる。中国の人達はこの昼休みを利用して、「昼寝」をよくしている。私達も昼休みには昼寝をしていたが、昼寝をすると、午後から眠くなるのがあまり無く、すっきりとした状態で過ごすことができた。最近では医学的にも、昼寝は頭をすっきりさせる効果があるとして注目されているらしい。中国の学生達



コロンス島からの風景

は、日によっては9時くらいまで授業があることがあるらしいが、それをこなし、さらにはそれから街へ遊びにまで行くらしい。中国人がいつも元気で活動的なものには、この習慣があるからではないかと思う。

私達は、暇ができるとよく外へ出て、買い物をしたりした。中国の物価は、全体的に日本より安い。物によって違うが、基本的に半額以下といった感じである。特に厦門にある「中山路」というところでは、夜になると露店が立ち並び、一晩中買い物客で溢れている。中国では物を買う前に値下げをすることが一般的で、私達も日本語学科の学生さん達にお願いして、値下げ交渉をよくしてもらった。理工学院の近くには「天天隆」という、日用品や食料品などが一通りそろっている店があり、中国での生活に慣れてくると、日本人だけで買い物に行ったりしていた。



理工学院近くに立ち並ぶ店

夜になるとほぼ毎日そこでお酒を買ってきて、ホテルの部屋で飲んでいました。中国のビールは日本のものより味が薄く、アルコール度数も約3%と低いものだった。私はビールが苦手だったが、これは飲みやすくかなりの量を飲んでいました。そのせいか、日本に帰ってきてからもビールを飲めるような体質になっていたから驚きである。

中国では、街を歩いていると、度々物乞いらしい人達を見た。また、ゴミ箱を開けてあさる人、人が飲み終わったビールのビンを集める人など、色々な人がいた。厦門は経済特区であるために、その町並みは大都会そのものであった。しかし、人々の間の経済格差はとても激しいらしく、裕福な人もいれば、とても貧しい人もいる。そして、観光などで厦門を出ると、その景色はがらりと変わり、よくテレビで見るような、いかにも「中国」という風景が広がる。現在の中国ではいたるところでそのような様子が見られるようである。現在急成長を続ける裏には、このような状況が広がっている。中国の発展はこれからも続くだろうが、それに伴う経済格差は、さらに広がっていくかもしれない。今からの中国は、このような問題にも取り組み、一人一人がちゃんとした生活を送れるような政策をとることが、ひとつの問題なのではないかと思う。

中国での生活は、とても充実したものであった。友達もたくさんでき、毎日とても楽しかった。楽しい時間は早く過ぎてしまうもので、18日という期間はあっという間に過ぎてしまった。できれば、あと一週間くらい滞在していたいと本気で思った。最初に感じていた不安は、滞在している間は全く感じることはなく、治安も良かった。もしかすると、これは「厦門」だからこそこかもしれない。しかし、中国に対するイメージが変わったことは確かである。

今回の中国研修で、私は本当にお金では買えない価値ある体験をすることができた。佐世保高専と厦門理工学院との学生交換の事業も、あと数回あると聞いている。私は来年から福岡に就職するが、来年日本に来る理工学院の学生の福岡観光がある際には、案内などの手伝いがあれば、呼んでもらいたい。それで中国の人たちが良い体験をできるなら、願っても無いことである。

これからの佐世保高専と厦門理工学院、そして、日本と中国の関係が、さらにより良いものになっていくことを、切に願う。



中国で出会った人達と



日本語学科の皆さんと

V. 活動報告書

「中国厦門理工学院から李達副校長、陳越校長事務室職員の訪問」

平成17年5月31日に昨年学術交流協定を締結した中国厦門理工学院から李達副校長、陳越校長事務室職員の2名が本校を訪問されました。今回の訪問は、今年度から実施する教員及び学生の相互交流に関する事前打合せのために行われたものです。

訪問期間中には、相互交流に関する打合せ、授業・実験の見学、教育研究施設の視察、歓迎レセプションが行われました。相互交流に関する打合せでは、本校の受け入れ計画案が説明され、それについての意見交換が行われました。

また、歓迎レセプションでは井上雅弘校長をはじめ本校関係者の外、両校の交流に関して協力をいただくこととなっている佐世保北ロータリークラブ会長二宮健氏、佐世保市企画調整部文化交流課長竹口奈保美氏、本校同窓会長中島洋三氏などもご出席いただき李副校長、陳越職員との交流を深めることができました。

今年度の相互交流の予定としては、7月に厦門理工学院から本校へ教員2名、学生4名を3週間受け入れ、また、10月に本校から厦門理工学院へ教員3名、学生4名を3週間派遣し、両校の交流を深めることとしています。



歓迎レセプション風景（一列目左側4番目から佐世保高専井上雅弘校長、厦門理工学院李達副校長、同学院陳越校長事務室職員）

「厦門理工学院留学経験者、中国留学経験者および中国進出企業関係者による講演会開催」

日中相互交流による実践的若年技術者育成事業に係る中国厦門理工学院との相互交流の一環として、本校教員3名及び専攻科学生4名が10月17日から11月4日にかけて厦門理工学院を訪問することに伴い、①厦門市を含む中国の文化・生活や滞在する場合の注意点（講師：中国留学経験者）、②中国の経済及び産業技術の現状（講師：中国進出企業関係者）について10月12日と10月13日に外部から講師を招き講演会を開催しました。

講習会の内容は次のとおりです。

（1）厦門理工学院留学経験者による講演

日 時 10月12日 16:10～17:30
場 所 多目的教室
受講者 教職員25名、派遣学生4名
講 師 比嘉勇貴氏（万国津梁館 マーケティングマネージャー）

（2）中国留学経験者及び中国進出企業関係者による講演

日 時 10月13日 13:20～15:00
場 所 大講義室
受講者 専攻科1年及び2年生（技術者総合ゼミ）
講 師 中国留学経験者 椎葉隆仁氏（大連大学留学経験）
中国進出企業関係者 福木善人氏（辻産業 理事 営業調達本部 調達部長）

受講者は厦門や中国での生活（食事、気候、人々、大学での暮らし等）、厦門での注意点（両国の歴史的係わり等）、中国における造船業を中心とした産業技術の現状について興味深くメモを取ったり、質疑応答の時間には今回派遣される教員及び学生をはじめ来年中国派遣を希望する専攻科学生から多くの質問が出されました。



講演風景（比嘉勇貴氏）



講演風景（福木善人氏）

「中国進出企業関係者による講演会開催」

日中相互交流による実践的若年技術者育成事業に係る中国厦門理工学院との相互交流の一環として、中国の経済及び産業技術の現状（講師：中国進出企業関係者）について2月2日に外部から講師を招き講演会を開催しました。

講演会の内容は次のとおりです。

中国進出企業関係者による講演

日 時 2月2日 13:20～15:00

場 所 大講義室

受講者 専攻科1年及び2年生（技術者総合ゼミ）並びに4年電気電子工学科、電子制御工学科学学生、本校教職員

講 師 中国進出企業関係者 小野和典氏（NECソリューション中国 企業情報通信システム企業部 副総経理）

講師の先生は現在まで約18年間中国の企業に勤務されており、中国で仕事をするきっかけや経験談、中国進出企業の現状、中国ビジネスやマーケティングにおける注意点やコツ、中国人の気質や日本との生活習慣の違い、宴会等でのマナーなど多岐にわたり講演をしていただきました。また、講師の先生が撮影された中国の街角や観光地の写真などを通して、現地での生活風景や中国の国土の広大さを改めて知ることができました。講義の途中に出題された「中国語クイズ」では同じ漢字でも中国と日本では意味が全く違っていたり、日本の会社名の表記の面白さなど、受講者から驚きの声が上がっていました。

また、小野氏には、講演前に本校須田専攻科長から「日中相互交流による実践的若年技術者育成事業」について説明を行い、来年度以降に実施を予定している中国での日系企業の工場見学やインターンシップなど本事業への協力を要請し、協力頂けることを確認しました。

本校では今後も定期的に中国進出企業関係者や中国留学経験者の講演を行う予定です。



講演風景

「本校教職員と専攻科生対象の『中国語会話講座』を実施」

日中相互交流による実践的若年技術者育成事業に係る中国厦門理工学院との相互交流の一環として、教職員等の中国語上達を目的とした「中国語会話講座」を本校の教職員と専攻科生を対象に実施した。詳細は以下のとおり。

実施日 平成17年10月24日～平成18年2月27日（月曜日実施、計15回）
 時間 18:30～19:30（1時間）
 場所 本校 多目的教室
 受講者 教職員26名、専攻科生15名 計41名
 講師 趙麗氏（長崎国際大学事務局）

< 講義概要 >

- ①中国語の発音（声調、母音、子音）
- ②基本表現（挨拶、自己紹介等）
- ③トラベル会話（空港、ホテル、レストラン、列車等）

この講座の受講者のほとんどが中国語を習うのは初めてで、最初は耳慣れない発音や文字にとまどう場面も見受けられたが、講師の先生の丁寧なご指導の元に、中国語の発音や挨拶、日常会話、旅行の際に必要な会話などについてテキストとCDを用い学習した。

講師の先生にはテキストの内容だけでなく、現地で日常良く使われている会話の表現方法や文章、単語などを発音を交えて分かりやすくご教示いただいた。現地でのエピソードや、中国に旅行した際のワンポイントアドバイスもあり、受講生は興味深く耳を傾けていた。半年という短い期間ではあったが非常に有益な講座となった。

受講者からは「大変ためになった。」「現地で実際に使われている言葉が学べて良かった。」「もっと中国語を学びたくなった。」などの感想が寄せられた。この講座の実施により、今後の厦門等における交流をはじめ、現代GPのさまざまな事業において役立つものと確信している。



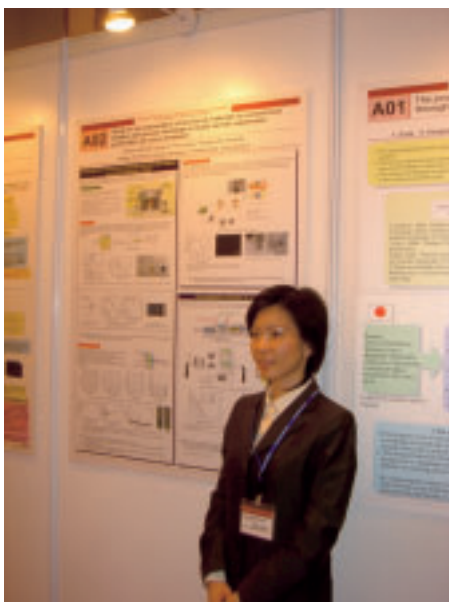
講義風景

「日中交流熊本大学上海フォーラム2005への教員の派遣」

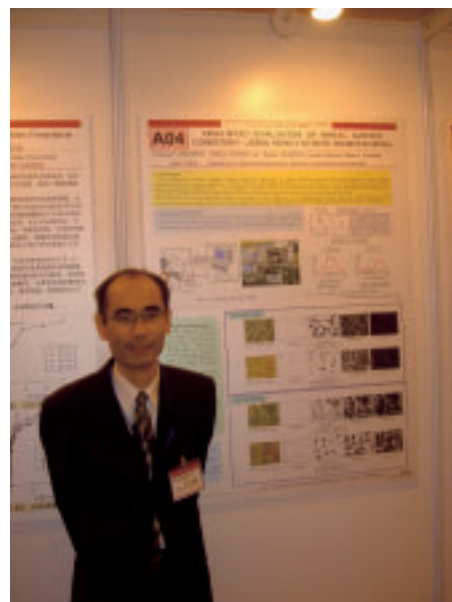
日中相互交流による実践的若年技術者育成事業に係る中国厦門理工学院との相互交流の一環として、本校教員4名を10月27日から10月28日にかけてオークラガーデンホテル上海で開催された日中交流熊本大学上海フォーラム2005に派遣しました。本フォーラムでは、400名以上の参加者があり、上海への進出企業や上海地区の大学に対して現代GP本年度採択の本校教育プログラムの説明や本校の研究紹介をパネル展示等で行うことが出来ました。このことにより、本教育プログラムの公表・普及を行うことができました。また、上海進出企業の見学や、上海進出企業の取締役として活躍している本校OBと会うことで中国進出企業の現状について知ることができました。これからは、熊本大学における日中交流プログラムと比較・検討することで、本教育プログラムの改善に役立てたいと考えています。



懇親会風景



発表風景(1)



発表風景(2)

「現代G P 大阪地区出張報告書」

学術交流委員 川崎仁晴, 重松利信

1) 大阪ガスエンジニアリング (大阪市此花区北港1-4-100)

平成17年11月28日に大阪ガスエンジニアリングにおいて本事業の説明を行うと共に、事業に対する協力の要請を行った。大阪ガスエンジニアリングはユニバーサルスタジオジャパンのすぐ隣に位置する社員116名の会社であり、主にガスを利用したコージェネレーションシステムを行っている会社である。中国には台湾近郊を中心に、ガス設備や下水処理施設に関する工場を持っており、主に現地での施工業務を行っている。当日は企画部の古寺係長及び芝原マネージャーの2名に対応していただいた。説明は、①本校の大まかな説明(学科の説明と学校の全体説明)、②佐世保市の学術特区の説明、③本事業の内容説明、④本年度行った事業内容、⑤今後の事業予定、⑥要請する協力内容、の順にそれぞれ行った。

本校の事業内容に関しては理解を示してくださったが、インターンシップに関してはまだ、難しい様子であった。また、中国側の見学に関しては、協力は惜しまないと言う事であったが、具体的な見学内容(モデルプラン)を示して頂きたいという要望があった。

2) 大阪市立大学 (大阪市住吉区杉本3-3-138)

平成17年11月28日に大阪市立大学において本事業の説明を行うと共に、事業に対する協力の要請を行った。大阪市立大学は市立の大学としては日本で最も歴史が古く、公立大学として最も規模の大きい大学で、大阪市内唯一の総合大学でもある。中国との交流は、上海にある上海大学や華東師範大学と交流されており、相互学生交流や語学研修、研究者招聘事業、フェロシップ等を行っている。当日は学術交流課の田中課長代理、森係長、小西事務員に対応していただいた。説明は、①本校の大まかな説明(学科の説明と学校の全体説明)、②佐世保市の学術特区の説明、③本事業の内容説明、④本年度行った事業内容、⑤今後の事業予定、⑥要請する協力内容、の順にそれぞれ行った。

本校の事業内容に関しては理解を示してくださった。中国との交流については、本校同様に、大阪市と上海市の姉妹都市関係が根本にあり、上記事業も学校同士の関係と言うよりは、大阪市と上海市が主導となって行われている様である。現在は行われていないが将来的には相互の単位互換制度なども視野に入れた国際交流を行う予定だそうである。また、事業用としてゲストハウスも建設されているようであり、設備面も充実している様子であった。



大阪ガスエンジニアリング



大阪市立大学

「中国上海近郊地区企業訪問報告書」

学術交流委員 重松利信, 森下浩二

訪問先：折江大学

対応者：工学部教授 陳国邦, 工学部教授 邱利民

所在地：杭州市内（杭州駅からタクシーで15分）に位置している。

規模：学生数約45000名の国立大学でキャンパスは6箇所にある。それぞれのキャンパスの広さ、施設は日本の大学規模であり、留学生用の寮もある。学生の質は中国でも5本の指に入るくらいのレベルの総合大学である。

母体：中華人民共和国

訪問は制冷与低温研究所へ行き、本学の説明、現代GPの説明を行い、研究所施設および学内施設の見学を行った。訪問した制冷与低温研究所には学部生40名、修士60名、博士20名、PD20名を要し、中国で一番進歩的な研究を行っている所である。研究上の関係は名古屋大学やアメリカの大学と密な協力体制をとっている。卒業生は日本の住友重機などにも就職させた実績がある。制冷与低温研究所・副所長・邱利民先生は本学との交流に非常に興味を示されたが、相互交流の経費の分担が現在のアモイとの協定と同等では“留学した者が得をする”ので大学当局が認めない可能性が高いとのこと。訪問は制冷与低温研究所を行い、本学の説明、現代GPの説明を行い、研究所施設および学内施設の見学を行った。もっと違った交流を模索すべきとの指摘があった。同様の交流を各国の大学（ドイツやフランス、韓国）と行っており、特別新しいことではなさそうである。もし学生を派遣する場合には、研究を主に考えた学術交流あるいは語学研修がよいと考える。但し、高専の学生の場合、研究に対する知識を増やす必要がある。また学内では英語も使え、議論も英語で行える。この点は非常にすばらしい点で、中国語と英語を同時に習得できる可能性がある。

訪問先：上海安川電動機器有限公司

対応者：総経理助理・工場長 清松益夫

上海市郊外（中心部より社用車で1時間半）に位置し、社員総数1077名（内、日本から派遣された社員は20名程度）の企業で中国に進出している企業としては中規模である。主力製品はインバーター、空調用大型モーター、エレベーター用IPMモーターを生産している。全体の80%が中国国内販売品でその他の20%は日本に輸出している。この会社には生産部門と品質管理部門のみ有り、開発部門は無く、本社での開発品を生産する工場として機能している。

今回の訪問では、本校が進めている現代GPの趣旨説明と本校の説明を行い、社内見学、社員食堂での検食を行った。清松工場長は現代GPの趣旨をよく理解いただき、できる範囲で協力したいとの意思を示していただいた。作業者は中国人であり、日本人が担当しているのはその技術指導と事務系のことだけであるので、当面は見学コースとして取り入れられればと考えている。

訪問先：上海教育委員会

対応者：国際交流係 副所長 張進

今回お会いした張副所長は日本の筑波大学で学んだことがあり、非常に日本語が上手であった。現在でも年に数回日本を訪れられている。大学は以下のように4種類ある。

①中華人民共和國立大学

②上海市立大学

③市管大学（国がお金を出して、マネージメントを市がする大学）

④私立大学

例えば①には復旦大学，上海交通大学，華東師範大学，同済大学などがあり、これらの大学はすべて上海市教育委員会が統括し、その数は全67校ある。これらは学歴教育校である。また、管轄外には学歴にならない職業訓練校がある。上海電気李武技師学院は学歴校ではなく、職業訓練校に相当する。

さて、教育・研究に対して受験者に人気のある大学をランク付けすると

復旦大学，上海交通大学

華東師範大学，同済大学

上海電気学院

となり、張氏から紹介された上海電気学院（上海電気李武技師学院の母体となる大学）は2年前に職業訓練校から大学に移行した学院であり、格付けは低い。また同様に紹介された上海第二工業大学は8階建てのビル一つにすべてをもつ職業訓練校である。

上海に進出している企業は4800企業に上り、教育委員会指導（上海市教育委員会 就業指導中心）の下、インターンシップ制度が始まりつつある。それに関して、日本から学生を派遣する可能性は言葉の問題があり、難しいとの指摘があったが、企業を選べば中国へのインターンシップも可能ではないかと思われる。尚、今後何かあれば協力していただける事、中国からの招待講演者となっただけの返答を戴いた。因みに横浜市，大阪市と上海市は姉妹都市協定を結んでおり、それに伴い横浜市立大学，大阪市立大学と上海市の67大学の間に学術交流協定が結ばれている。

訪問先：上海電気李武技師学院

対応者：副院長 毛錫平，顧問 姫錦珍，黄先生

所在地：上海市郊外（中心部よりタクシーで1時間）の楊浦地区に位置している。

規模：学生数約1000名、教員60名程度の上海では下級の学校である。昨年までは中学校卒業者が入学しており、現在は高校卒の学生および会社からの派遣学生を受け入れている。電気系・機械系・コンピューター系の3学科より構成されている。

母体：上海電気学院。また、学校運営資金は上海市総工会（日本の電気系商工会）より拠出されている。因みに顧問は上海総工会より派遣されている。訪問は学校の首脳陣に対して公式訪問的に行われ、本学の説明，現代GPの説明を行い、学内施設の見学を行った。学院内には寮も完備されている。当学院は電気・機械系の会社の社員の再教育機関として存在し、職工を育成することを目的としている。中国では職工は初級・中級・高級の国家資格があり、ここでは技能検定により、これら職工を輩出している。従って、教員も高級エンジニアの資格を持つ職工である。また、上海電気学院の附属学校的存在でもあり、編入学することで学士の免許を取得できる。当学院との話合いは上海総工会対外交流中心の海外部主任の呉美平を通して行われた。交流に対して非常に積極的で是非協定を結びたいとの趣旨であった。アモイ理工学院との交流内容についても説明を行い、「まずは互いの教員を語学研修させてはどうか」「日本の製品規格など最新の内容を教えてほしい」「本学を通して日本の企業に就職を斡旋してほしい」など実際的な話もあった。ただ、本校，当学院ともに語学系の学科が無く、本格的な語学研修は他学院等で行わざるを得ない

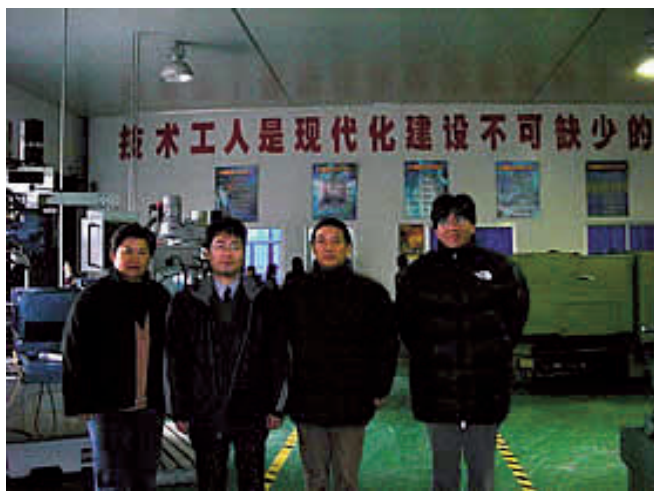
のではないかとと思われる。次回は校長や事務部長との会談を希望された。母体の上海電気学院の副院長の王也坊女子とも会食を共にする機会に恵まれた。副院長も交流協定に積極的で、もし技師学院との協定が結ばれれば、留学に対する協力は惜しまないとのことであった。

訪問先：辻産業重機（江蘇）有限公司

対応者：企画課・課長 甲斐晃之

上海市郊外（中心部よりタクシーで2時間半）の張家港市に位置し、社員総数1800名（内、日本から派遣された社員は40名程度）広さは700m×400mの敷地面積を有し、社内に税関付き埠頭を2つ有する企業で中国に進出している企業としては大規模である。主力製品はイン船体の船主・船尾を生産している。全体の80%が日本への輸出品でその他の20%が韓国輸出と中国国内販売品である。この会社には設計・生産・管理部門を中国に移管しており、辻産業の主力な工場として位置している。また、日本人社員用の社宅も完備されている。今回の訪問では、本校が進めている現代GPの趣旨説明を行い、社内見学、役員食堂での会食を行った。

甲斐課長には現代GPの趣旨をよく理解いただき、できる範囲で協力したいとの意思を示していただけた。学生が中国を訪れる際には見学させていただける様である。また、実際に学生を派遣する場合には、設計部門での研修となるが、数ヶ月の短期では中国人設計者（ほぼ中国の大学を卒業した学士）との密な関係を構築することは難しいと思われる。片言でも中国語をマスターしておく必要がある。



「現代G P 東京地区出張報告書」

学術交流委員 小野文慈、森下浩二

1. 出張先

- ①首都大学東京（東京都八王子市南大沢1丁目1番地）
- ②NEC東金（東京都千代田区西神田3丁目8番1号）

2. 目的

現代的教育ニーズ取組支援プログラムによる他大学の学術交流内容調査と、在中日系企業の会社訪問

3. 期間

平成17年12月14日 ～ 平成17年12月15日

①（公立大学法人）

首都大学東京(2005. 12. 14) 15:00～16:50

- 面会者；企画室企画担当課長 佐藤智英
学生課課長 田村敏行

両氏について以下の点について懇談を行った。

- 現状の交流協定について
- 中華人民共和国との国際交流協定
- 上海交通大学（国立）との学術交流
- 国際交流協定の締結手続き
- H18. 4月都立航空高専と都立高専の合併問題



②NEC東金(2005. 12. 15) 10:00～11:00

- 面会者；総務部長 矢島和彦氏
- 従業員；2万人（1万7千人が外国人労働者
うちアモイ1万人）
- 給与月；7千円、3百～千人が入れ替わる。
- 平均年齢；25歳
- 電気デバイスの7割が日本製品
- インターンシップの受け入れは難しいかも知ない。



「中国上海近郊地区企業訪問報告書」

学術交流委員 須田義昭、小野文慈

1. 目的 国 中華人民共和国福建省廈門市

2. 目的

現代的教育ニーズ取組支援プログラムによるアモイ理工学院との来年度の学術交流打ち合わせ、および次年度より計画のインターンシップ実施のための在中日系企業の会社訪問

3. 出張期間 平成17年12月17日～平成17年12月24日

4. 出張者 佐世保工業高等専門学校教員 須田義昭、小野文慈

5. スケジュール

月 日	スケジュール
12/17～18	佐世保市から廈門市へ
12/19	午前；①廈門理工学院来年度の交流計画
12/20	午前；廈門理工学院新キャンパス視察
12/21	午前；②NEC東金訪問／午後；③FDK訪問
12/22	午前；④廈門大学、集美大学と会談／午後；廈門大学訪問見学
12/23～24	廈門市から佐世保市へ

6. 訪問内容

① 廈門理工学院との会談(12/19)

参加者；朱文章(副学長)、項茜(院長弁公室主任—女性)、刘徳友(教務主事長)、魏丽春(外国語科—英語)、陳越(院長弁公室)、須田義昭(佐世保高専教授)、小野文慈(佐世保高専助教授)

打合せ事項；

- 現代GPの説明を須田が説明
- 2006年3月2日に佐世保市で開催されるフォーラムの招聘依頼
 - ① 校長 or 副校長(挨拶依頼)
 - ② アモイ市人民政府外事弁公室主任
 - ③ 受け入れ担当者(陳越)
 - ④ 交流者(魏丽春+学生)
- 評価委員会(3/2のフォーラム後、評価してもらう伝達)
- 佐世保高専からの派遣学生の評価依頼(感想文持参)
- 報告書の作成依頼 王先生(又は魏先生)、陳先生又は他の受入担当者)、交流に参加した学生の代表者1名 締め切り 1月中旬



- 2007年度の中国語の講師依頼
- 来年度（2006年）の交流事業の打ち合わせ
 - ① 交流期間は来年も3週間にするか？→インターンシップがあるなら4週間でも良い。検討。
 - ② アモイ市教育委員会委員長が元アモイ理工学院校長なので挨拶をお願いしてはどうか？
 - ③ アモイ理工学院の学生の訪日は2005年時より2週間前。
 - ④ 学生の不満希望は現段階では上がっていないが、互いに個人調査をして情報交換をしよう。
 - ⑤ 互いの研究テーマを上げ、共同で国の科研申請をしよう。-研究見合いをしよう-
研究テーマの翻訳あるいは英語でOKではないか？
 - ⑥ ホームステイをしたい。2005年は1日だけホームステイを実施した。
 - ⑦ 人数を増やしたい。（現4→6人女性2名が良い）
 - ⑧ 専門の先生が来てもよいか？→英語で講義（魏さん通訳、講演の先生引率）。検討。
 - ⑨ 高専からの教員派遣をしてもらいたい。半年とか1年、逆も可能か？→検討。
 - ⑩ 副校長、および教育委員会の依頼は1月中旬までに行なう必要がある。
 - ⑪ 研究交流を行なうのが1番の目的である。従って専門の先生同士の交流をしたい。

② NEC東金訪問

面会者；千葉昌雄（総務部部長）

- 労働者9000人で26名の日本人が労働している。労働者のほとんどが25歳以下である。狭いスペースの間に労働者が一列に並んで作業しており、肘同士がぶつかるほどである。生産革命ということに取り組んでおり、座り作業を無くし立ち作業に移行した。100人募集すると500人が面接に来る。去年10%の賃上げを行った。
- 2006年度インターンシップ依頼に対し協力的であり、検討をしていただけるとのこと。



③ FDK訪問

面会者；石田忠男（総経理、日商會所屬） 黄煌
（管理分部長）、若松吉伸（副部長、工場案内）

- 労働者1600人で11名の日本人が労働している。労働者の年齢層は同じで25歳以下である。東金に比べスペースは広い。トヨタ看板方式を採用しており、緻密な生産管理を行っている。
- 来年度のインターンシップへの協力要請に対し、喜んで協力したいと承諾。また、本科生の見学旅行も受け入れOKである。



④ アモイ大学と集美大学の会談

面会者；通文(アモイ大学、国際合作交流係、係長主任)、陳 輝(集美大学、国際合作交流係、秘書)、孔 速婷(アモイ市人民政府外事弁公室係長)

現代G Pの説明を須田が行った。アモイ大学は3万人の学生がおり、60名の日本人が在籍している。化学工学科は中国でベスト5に入り、本校との交流は難しそうである。語学交換留学できるかもしれない。集美大学も語学交換はできるかもしれませんが、是非次回たずねて下さいとのこと。アモイ市人民政府外事弁の孔さんの計らいによりこの会談が実現できたが、次回見学の可能性あり。

「現代G P 南紀地区高専出張報告書」

学術交流委員 川崎仁晴

1) 近畿大学工業高等専門学校（三重県熊野市有馬町2800）

平成17年12月22日に近畿大学工業高等専門学校に赴き、本校の現代GPに関する取り組みを説明するとともに、近畿大学の取り組みの経緯と平成17年度の事業の取り組み結果に関する説明を受けた。時間は10時から1時間ほど。対応していただいたのは、神野校長、向井教務主事、村田教員、中西事務長代理の4名。

近代高専側からは申請書の内容などに関するいろいろな質問を受けた。特に事業の骨子である中国との技術交流の内容と、旅費や滞在費、先端技術教育設備の利用方法に関する質問をうけた。近大高専が行っている深圳外国語大学等との交流は、本校同様のインターンシップとしての活動であり数種類の相互交流が行われていた。一方近大高専の場合、近畿大学への進学が保証されているため長期（数年）の交流も可能であり、将来的には教員も含めた長期受入も視野に入れているようであった。本年度はそのための協定書作成にかなり時間を費やされており、苦勞されたようである。本校の取り組みにはかなりの評価をしていただいたが、中国では留学に関する仕組みが日本やアメリカ等と異なることや、中国留学生の生活費に関して十分な対応をした方がよいとのご助言を受けた。近代高専では交流に関する協定書があり、中国の教員留学とそれに関する仕事や給与体系もきちんと決められている点が大いに参考になった。また、学寮内にきちんとしたゲストハウスがあるようで、交流以外にも地域交流に利用しているようであった。

2) 和歌山工業高等専門学校（和歌山県御坊市名田町野島77）

平成17年12月22日に和歌山高専に赴き、本校の現代GPに関する取り組みを説明するとともに、和歌山高専の取り組みの経緯と平成17年度の事業の取り組み結果に関する説明を受けた。対応していただいたのは学生課の大野課長と千原係長で、時間は16時から1時間ほど。

和歌山高専側からこちらへの質問はなく、主に和歌山高専の事業内容に関して、こちらから質問を行った。交流は教員同士の学会における交流がきっかけで始まり、平成16年度から学生同士の相互交流を中心に行っておられた。交流学生は本科高学年生で10名、2週間ずつ7月に受入事業、3月に派遣事業を行っていた。受入時の交流内容は本校とほとんど同じで授業見学や周辺の文化施設見学を行っていた。派遣費用は半分を学校の後援会が、半分を学生が負担するシステムであった。近大高専同様、古い専攻科の建物を改造した交流用のゲストハウス（福利センター）を完備しており、本校の寮より充実した環境であった。学生同士の交流は非常に深まるようで、事後もメール等のやりとりを行っているとのことであった。今後は共同研究なども行い、事業の拡大を図る様である。



和歌山高専での説明



和歌山高専の福利センター

VI. その他の報告事項

本事業に関するその他の報告事項を列記する。

1. 先端技術教育設備の購入

本事業では、最先端機器を使用した新しい技術の習得を1つの目的としている。これを実行するために、浜松ホトニクス社製の分光器付きICCDカメラセット（PMA-50）を導入予定である。本設備備品は、選定事業における実験や演習の授業において、日中相互の学生が世界最先端の装置を協力して使い、相互交流を図るものである。本装置は平成18年度3月に搬入・設置予定であり、設置場所は専攻科棟1F集積回路実験室とする。利用頻度は、本年度は本校学生により週1日×100分程度を予定しているが、次年度より本取組を他学部にも拡充する予定であり、将来的（次年度以降）は週4日×100分程度になる見込みである。

2. ビデオ会議システムの借料

本事業を通じて、中国企業および厦門理工学院との連絡を頻繁にし、会議をより正確に行うためにソニー製オールインワンビデオ会議システム（PCS-TL50）を4年間レンタルすることとなった。本設備は、会議時にはTV会議システムとして、交流時には双方の連絡事項や確認を行う機器として用いる予定である。

VII. あとがきにかえて

「日の出の勢い」

学術交流委員 電気電子工学科 川崎仁晴

佐世保市がこれまで進めてきた中国との交流事業と、本校の技術交流運動、県北地区の地域活性化事業が実を結び、本現代GPプログラムが選択された事は誠に喜ばしい限りであり、関係者各位には心からの謝意を表したい。因らずも在長崎中国総領事館開設二十周年の年にこのような事業が始まったことは、何かの因果を感じざるを得ない。

話は変わるが、先日偶然目にしたテレビで電気自動車の特集が行われており、慶応大学で開発された電池自動車「Eliica」を小泉首相が「エネルギー革命、産業構造改革だ！」と絶賛していた。これは、いわゆる“ゼロエミッション”に近いにもかかわらず、最高時速370km/h、加速度0.68GとF1車以上の性能を持つため、量産化が叶えば画期的な自動車となるであろうと考えられている。日本の技術力はまだまだ捨てたモノではないようだ。しかし、残念ながら日本では量産される予定はなく、中国で開発が進められているらしい。

自動車と言えば、報道によると2005年の自動車販売数で、トヨタが米ゼネラルモーターズ(GM)に次いで世界第2位であったそうである。しかも販売台数の伸び率では、米国でもGM社を上回っており、次年度は1位になる可能性もあるらしい。日本の経済力もまだまだ捨てたモノではないと思う。しかし、よく読み解くと、それを支えているのは日本の地理的優位性を利用した在中国トヨタ工場での高い生産性であることに気付く。何故1位になれなかったのか。それも中国が関連しているらしい。すなわち、伸び悩むGM社で大きく躍進したのが中国における販売台数の増加であるため、その分GM社が競り勝ったようだ。こうして考えると、技術、生産、経済等様々な分野において世界動向のキャスティングボードは中国が握っている様に感じるのは私だけではあるまい。その結果として、今回の交流で多くの派遣者が体感した目覚ましい発展ぶりが現れたのだろう。今の中国はまさしく「日の出の勢い」であると言ったところか。

西暦607年に、当時弱小後進国であった日本の推古天皇は、ここ長崎(五島ルート)をへて、当時世界の超々先進国である隋(中国)に対して交流を図った。このとき聖徳太子が小野妹子に託した親書が有名な『日出處天子致書日没處天子無恙云々』と言う内容である。この交流が「礎」となって、その後日本は発展・成長し、現在のように大国と言われるようになった。世界から見れば、まさにそれは「日の出の勢い」であったに違いない。しかしながら、現在ではその勢いにもかげりが目立ち始めている。一方、現在「日の出の勢い」の中国も、環境悪化等の問題を抱えている。本交流が1400年前に行われた様な大きな1歩を歩み出す「礎」となり、両国が手を取り合って大きく進展していくことを切に願っている。

